誤解から始まる英雄譚
～クズで弱っちい俺が何故か周りに最強認定されているんだが？～

くろひつじ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「貴様殿に『全てを屠る断罪者』という名を送ろうと思うが、どうだ？」
（主人公は不意打ちで一人倒しただけ）
「その剣技、『剣聖』と呼ぶに相応しい！」
（主人公はちょっと躓いて攻撃を避けただけ）
こんな感じの作品です。気になったら一話目をどうぞ。
一応、あらすじらしき物は下にあります。

舞台は剣と魔法のファンタジー世界。

人々を襲う魔物に満ち溢れた良くある大陸。
世界を脅かす魔王が存在する中、それでも争いを止めないような人間達の国でのお話。
この物語の主人公は流れの傭兵ジェイド。
金と酒が好きで女にだらし無い、でも少しだけ頭が切れる、そんなごく普通のクズな童貞だ。
いつも通り戦場で日課に勤しんでいたある日、彼はハーフエルフの美少女ネフィーと出会う。
それを切っ掛けとして次々と発生する有り得ないレベルの「勘違い」の連鎖。
いつしかそれは止められない物になっていき――
やがて、人々はこう言った。
彼こそは真の英雄である、と。

目次

第一話：出会い ―― 1
第二話：自己紹介 ―― 11
第三話：オーガ ―― 17
第四話：巨人殺し ―― 27
第五話：エルフの里 ―― 34
第六話：ドワーフの集落 ―― 41
第七話：和解 ―― 48
第八話：エルフ目線とドワーフ目線 55
第九話：お誘い ―― 61
第十話：旅立ち ―― 69
第十一話：将軍 ―― 75
第十二話：王女様のお願い ―― 83
第十三話：岩山の戦場 ―― 89
第十四話：命の対価 ―― 97
第十五話：主戦場 ―― 103
第十六話：戦の夜 ―― 113

第一話：出会い

顔を上げれば空は快晴。
雲ひとつない青空だ。
いやぁ、気持ちが良いもんだな。
雨はどうにも苦手だし、有難いことだ。
乾いた風が吹いて火照った体を冷ましてくれる。
これで酒とタバコがありゃ最高なんだが、生憎とどちらも持っていない。
仕方ないし、さっさと仕事して街に帰るか。
さてと、現実逃避終わり。
視線を朗らかな空から地上に落とすと。
見渡す限りの死体の山。
乾いた風が血の香りを撒き散らす、戦場跡。
敵軍も味方軍も死屍累々。相変わらず嫌な光景だ。
しっかし味方さんもちったぁ頭使ってくれないかね。

数で勝ってても地形が不利だから負けるの分かってたろうに。
きっと司令官が無能だったんだろうなー。
ともあれ、あの惨敗加減じゃ国が滅ぶのも間近だわな。
まぁ俺みたいな雇われの傭兵からしたら、自分に被害が無けりゃ何でも良いんだけどな。
しかもずっと隠れてた奴に言われたくは無いわな。
まぁ今はとにかく、飯の種を回収しますかね。
そこら中に転がる兵士の装備を回収して街で売り払う。
それが俺の仕事だ。
いわゆる火事場の泥棒って奴だな。
傭兵なんておっかない仕事をしてるのは、他の奴らよりも早く装備を回収出来るからだ。
我ながらクズだとは思うが、背に腹はかえられん。
金が無いと飯が食えない。かと言って俺みたいな身分証明できる物が無い奴はロクな仕事に付けない。
だからまぁ、勘弁してくれよ、味方さん。
俺だってまだ死にたくねぇんだわ。

※

しばらく探してみたが売れそうな装備は見当たらなかった。

敵軍の紋章入りの剣があったからそれだけは確保。

でもこれだけじゃ今日の飯代にしかならないし、今回味方が使っていた砦に行ってみることにした。

残兵が居るかもしれないからリスクもでかいけど、あそこならまともな剣くらいはあるだろう。

そんな事を思いながら砦に近寄ると、すぐ側の小屋から男同士の口喧嘩が聞こえてきた。

「クソッタレが！　俺が連れてきたものをどうしようが俺の勝手だろ！」

「ふざけるな！　こいつは俺のもんだ！」

「うるせぇ！　死にやがれ！」

「殺してやらぁ！」

こっわ。少し様子を見た方が良さそうだな。

足音を殺して小屋に近付くと、剣を打ち鳴らす音が響いてきた。

次第に激しさを増していく剣戟はやがて、一際高い音を鳴らした後にピタリと止んだ。

終わったかと思って小屋の中を覗き込むと、首を突かれて死んでいる男と、肩に深い切り傷を追ってフラフラしてる男の姿。
そしてその向こうには、なんかめちゃくちゃ可愛い女の子が転がっていた。
窓から注がれる光でキラキラ輝く長い銀色の髪。
顔立ちは整っていて、まるでどこかのお姫様みたいだ。
背は俺と同じくらいで胸はでかい。
すらっとした生足がこれまたセクシー。
いいね、実に俺好みのスタイルだ。
だが、服がボロボロなのはどうしたもんか。
拐われて来たのか捕虜なのか、何にせよロクな事じゃないだろう。
可哀想に、綺麗な顔も土で汚れてしまっている。
「ぐへへへ……これでコイツは俺のもんだ！」
うわぁ、やべぇなアイツ。血まみれでニヤニヤ笑ってるとか変質者にしか見えん。
げ、ズボン降ろしやがった。
尻見えてんじゃねぇか。嫌なもん見せやがって。
「久しぶりの上玉だぁ……楽しませてもらうぜぇ」
「てぇりゃ！」

あまりに見苦しかったので後ろから剣で一突き。
変質者は呆気なく地面に倒れ込んだ。
いかん、ついやってしまった。
……まぁいいか。変態だし。
さぁて、何か持ってないもんか……お、こいつ上質な魔石持ってるじゃねぇか。
これを売れば三年は遊んで暮らせそうだな。
よっしゃ、ツイてるぜ！
んじゃ、そろそろこの子を起こしますかね。
こんな所に置き去りにする訳にも行かねぇし。
「おい、生きてるか？」
「……んっ……ここは……？」
おし、目が覚めたな。
しかし見れば見るほど可愛いなこの子。
座っていると地面に着きそうな程に長い銀髪に、意志の強そうな翡翠色の瞳。
声も最高に可愛いし胸もデカいし、文句の付け所が無い。
凛とした佇まいが似合いそうな女の子だ。
よく見たら高価な服を来てるし、どっかの貴族様かね。

「我は、賊に襲われて……痛っ！」
「怪我をしてるのか。見せてみろ」
押さえていた腕に触れてみると、血は出てないし折れてもない。
ただの打ち身なら持ち合わせの塗り薬で問題ないな。
「これで良い。他に痛むところは無いか？」
「大丈夫だが……もしや我を助けてくれたのか？」
「まぁ、結果的にそうなるのか？」
すみません、あまりに見苦しい光景だったからやっちゃっただけです。
でもそんな事言えないしなぁ。
「すまない、礼を言おう。貴様殿の名を聞かせて貰えぬか？」
……貴様殿ってなんだ？
それはともかく、こちとらただの火事場泥棒なんだが。
でも可愛い女の子の前では格好付けたいのが男ってもんだし、ここはそれらしくしておくか。
「俺の名はジェイド。流れの傭兵だ」
どうだ、このキメ顔。この角度が一番イケメンに見えるらしいからな。
「ジェイド……改めて礼を言おう。我はネフリティス・グリーンランドだ」

お、笑うと可愛いのな、この子。
普段は美人さんで笑うと可愛いとかマジチートだわ。
だが待て。いまグリーンランドって言ったか？
「驚いた。その名前、エルフか？」
「うむ。だが我はハーフ、人間とエルフの子だ」
言いながら横髪をかき上げると、その耳は僅かに尖っていた。
へぇ、ハーフエルフなんて初めて見たな。
森に引きこもってるエルフ達より珍しいって聞いたけど。
あ、てかハーフだから胸がでかいのか。
エルフってスレンダーな奴が多い種族らしいし。
この子も胸以外はすらっとしてるもんな。
「是非とも貴様殿に礼を尽くしたいのだが、生憎と持ち合わせが無くてな……」
あぁ、そりゃそうだわな。
何なら体で払ってくれても良いんだけど、この空気で言える訳も無い。
俺から言い出す勇気なんて微塵も無いしな。
うーん。とりあえず、ここに居ても仕方ない。
「気にするな。とにかく着替えを用意しないといけないな」

この子、服がボロボロでめっちゃ肌見えてるし。胸とか溢れそうだもんな。
俺的にはエロくて良い感じなんだが、童貞にはちょっと刺激が強すぎる。
「……なんだ？　その、落ち着かないのだが」
胸を隠すように身をよじる巨乳美少女。
いやぁ、眼福ですよ、はい。
出来ることならガン見したいもんだ。
でも今の俺はイケメンモード。イケメンはそんな事はしないのだ。
かなり勿体無い気はするが、ここは仕方ない。
とりあえず俺の上着を羽織らせておくか。
「服を買うまではこれを着てくれ」
「ふむ……貴様殿は優しいな。ありがとう」
晴れやかで輝くような笑顔を返されて、俺の汚れきった心は大ダメージを喰らった。
ぐふぅ……と、とりあえず、街に行くか。

■視点変更…ネフリティス■

ジェイドに連れられて砦を出ると、そこに広がっていたのは正に屍山血河の光景だった。

見渡す限りの死体。戦があったのだから当たり前だが、両軍共に被害が大きいのは珍しい。
此度は余程の激戦だったのだろう。
しかしその戦を、ジェイドは怪我ひとつなく生き抜いた。
それも傭兵という最前線で戦う職業でありながら、だ。
更には我を捕らえていた二人の手練を無傷で屠(ほふ)り、我を助け出してくれた。
話を盗み聞いた限り、あの者達は軍の中でも有数の武芸者だった。
それを意図も容易く倒したという事は、ジェイドは相当な腕前なのだろう。
しかも、この男は戦が終わって尚、警戒を解かない。
常に周囲に気を配り、たまに我の様子を確認しながら慎重に歩みを進めている。
どれだけ用心深く、どれだけ戦慣れしているのか。
正に戦の為に生きる者。恐ろしいものだ。
それに、その。ジェイドは優しい。
怪我をした我に手当をし、服を貸してくれ、それを恩に着せない度量を持ち合わせている。
良い男だ。このような男に中々出会うことは無いだろう。
願わくばこの縁を大事にしたいものだ。

次第によっては我が伴侶として……いや、いくら何でもそれは飛躍しすぎか。
我としたことが少し同様しているようだ。
しかし、そうだな。
このような物を何と呼べば容易のだろうか。
ただの傭兵ではない。かと言って騎士でもない。
ふむ……敢えてこの者を表す名を用意するとしたら。
「貴様殿に『全てを屠る断罪者（エクスキューショナー）』という名を送ろうと思うが、どうだ？」
「……よく分からないが、良いんじゃないか？」
「だろう？　我も良き名を考えついたものだな」
いかん、つい上機嫌になってしまった。
思わず顔がにやけてしまったが、まぁ見られていないようだから問題ないか。
……ふふ。しかし、実にこの者に相応しい名だ。

第二話：自己紹介

街に戻って服屋で女性物の服を買い、ネフリティスにプレゼントした。
俺の好みで選んでみたんだが、この服を選んで大正解だったな。
ネフリティスの雰囲気や髪色に合ってて超可愛い。
肩が出ているタイプのブラウスにスカートだけど、スカートは丈が短めだ。
ハイソックスとの間に健康的な太ももが見えているのが素晴らしい。
しかも胸がかなり強調されたデザインなので、彼女の戦力は桁外れに上がっている。
銀色の髪に翡翠色の瞳ってのが俺の性癖に突き刺さってるしな。
エロ可愛いは正義。異論は認めん。
「どうだ、似合っているか？」
「あぁ、とても似合ってる」
「そうか。それは良かった」
嬉しそうにくるくると回る姿に癒される。
はぁー。可愛いわー。

ちなみに最初はちゃんと生地の厚い服を選んだんだけど、エルフの血が入ってる彼女は気温の変化に強いらしく、そこは辞退された。

金額も高かったから助かったし、良いものも見ることができたし、俺にとっては得しかない。

なお、新品の服ってのはバカにならないくらい高いので中古品だ。

金貨一枚……一般人のひと月の稼ぎと同じくらいって言えばどれだけ高価な物か分かるだろう。

本当なら見栄張って買ってやりたかったけど、さすがに無理だったわ。

「さて、次は飯屋だな。落ち着いた所で互いの話と今後の予定でも話そう」

「む？　今後の予定とは……？」

「ネフリティスを放っておく訳にも行かないだろ。ちゃんと送り届けるさ」

実際彼女は金を持ってないし、エルフの森って言えばそこそこ遠い。

こんな可愛い女の子が護衛も雇わないで一人で旅をするなんて、それこそ襲ってくださいって言ってるようなもんだ。

助けてしまった以上は最後までやっておきたいしな。

「それは助かるが……良いのか？」

「ついでだからな」

魔石売った金があるからしばらくは働かなくても良さそうだしな。
美少女とお近づきになれるってんならやらない理由はない。
「貴様殿、重ねて礼を言う。それと我の事はネフィーと呼んでくれ。親しい者は皆そう呼ぶ」
「分かった。じゃあネフィー、行こうか」
「あぁ、よろしく頼む」
さぁて、飯だ飯。運動して腹も減ったし、何食おうかね。
※
厚切りの豚肉。それに塩コショウを振って焼いただけのシンプルな料理。
こいつが俺の好物だ。
表面がカリカリになるまで焼かれた肉は独特な香ばしさがある。
いや、実に食欲をそそるね。
ナイフを入れるとじゅわぁっと肉汁が溢れ出し、香ばしさに脂の甘い匂いが混じって堪らない香りになる。
大きめに切った塊にフォークを突き刺し、その柔らかな豚肉を一口で頬張る。
うめえぇぇ！　やっぱこれだわ！
すかさず麦酒を流し込むとシュワっとした爽快な喉越しと仄かな苦味。

口の中の脂が全部無くなったところで、次の一口。
この流れが止まらない。
ガツガツと食い進め、あっという間に二人前を食い終わってしまった。
いやぁ、美味かった。ごちそうさん。
「貴様殿はよく食べるな」
「ネフィーはパンとサラダだけで足りるのか？」
「我にはこれで十分だ」
はぁー。女の子ってのはよく分からんな。
こんなちっぽけな量で足りるなんて信じられん。
まぁ本人が満足してるって言うなら良いか。
「さて、じゃあ改めて自己紹介と行こうか。俺はジェイド、傭兵だ。今回の戦争に参加していた」
「やはりか。腕は確かなようだ」
キラキラした笑顔を向けられた。眩しい。
多分ネフィーが想像してるのは一騎当千の凄腕傭兵なんだろう。
実際はただのハイエナやろうなんだけどな。
「我はネフリティス・グリーンランド。森で狩りをしている時に賊に襲われてしまい、あ

の場所まで連れて行かれた訳だ」
おいおい、誘拐かよ。国の兵士が何やってんだ。
敵国も酷いもんだったし、最近はどこも揃って馬鹿ばかりだな。
昔は戦上手な国王とか立派な騎士団とか居たもんだが、最近は質が悪いんかね。
「里までエスコートしてくれるのであれば、その時に礼をしたいと思っている」
礼か。エルフだと金は期待できないから、高く売れる魔導具あたりが貰えると良いな。
ネフィーと知り合えただけでも十分な報酬だけど。
あーあ、こんな可愛い彼女が欲しいなー。
俺みたいなクズとは合わないだろうけどさ。
「となると、まずは馬車で東に向かう必要があるか。渓谷を抜けるルートだが体力は持つか？」
いくら馬車に乗れるからと言っても、舗装されていない道を行くのは中々に体力を使う。
尻も痛くなるし、慣れていないと大変だろう。
瞬間転移の魔術を使える奴に頼むのもありだが、値段が馬鹿みたいに高いからなぁ。
そっちだと全財産使っちまうし、できれば避けたいもんだ。

「大丈夫だ。こう見えて旅は慣れているからな」
「そうか。じゃあ明日の朝に出発しよう」
俺の場合は旅支度なんてすぐに終わるし、早いに越したことはない。
ネフィーも心細いだろうし、急いでやろう。
「ところで貴様殿……一つ、お願いがあるのだが……」
俺が席を立とうとすると、ネフィーは短いスカートの裾を引っ張り下げながら真っ赤な顔で言った。
うん？　なんだ？
「その、だな……非常に言い難いことなのだが」
「俺に出来る事なら力になるが」
「……ボロボロだったから履いていないのだ。新しい下着が欲しい」
その言葉を聞いて、ついスカートの方に視線を向けた俺を責められる男はいないと思う。

第三話：オーガ

女性用の下着を購入してネフィーに着替えさせた後、宿で悶々とした夜を過ごした。
いや、部屋が空いてなかったから同じ部屋で寝ることになったんだよ。
ていうかさ、エロ可愛い美少女（しかも俺は命の恩人）と同じ部屋とか、どんなシチュエーションだよ。
しかも今どんな下着を履いてるかまで知ってるんだぜ。
ムラムラしながらも手を出さずに徹夜した俺を褒めて欲しい。
いや、だってなぁ。せっかく知り合ったんだから嫌われたくないし。
どうせなら合意の上でヤりたいじゃん。
強姦は趣味じゃないしな。
「……貴様殿、大丈夫か？」
「平気だ。徹夜は慣れている」
「そうか。夜を通しての見張り、感謝する」
どうやらネフィーの中ではそういう事になってるようだ。

真実は俺の胸の奥にしまっておこう。

※

二人乗りの馬車を借りてガタゴト行くこと三時間、ようやく渓谷に到着した。

ここを抜ければすぐにエルフの住む森だ。もうひと踏ん張りといった所だろう。

しかし、その渓谷の入口にたくさんの人が集まっていた。

どうも様子がおかしいな。トラブルでもあったんだろうか。

ちょっとその辺の奴に聞いてみますかね。

「何かあったのか？」

「モンスターが出たんだよ。警告の真ん中にオーガが陣取ってやがるんだ」

「オーガ……巨人か。被害は出ているのか？」

「それは大丈夫だ。今はモンスターを退治する為に街から一級冒険者が来るのを待ってるところだよ」

なるほど。冒険者はモンスター退治の専門家だからな。

一級ともなればオーガを倒してくれるかもしれない。

ふむ。それなら俺達も退治されるのを待つとしよう。

そう思いながらネフィーを見ると、不敵な笑みで大きく頷かれた。

「問題ない。この我とジェイドに任せておけ！」

ネフィーさん!?　なんて事言ってんだお前！
「我が魔法とジェイドの剣があればオーガなど容易い敵だ！」
「ちょ、おい……」
「そりゃあ良い！　頼んだぜ兄ちゃん！」
「助かった！　これで渓谷を通れるな！」
あ、ダメだ。これもう後戻り出来ない奴だ。
いやいやいや。俺ちゃん死んだろこれ。
オーガなんて雑魚な俺にどうにか出来るわけがねぇだろ、おい。
でもこの空気で断るのは無理そうだしなぁ……
くそ、仕方ない。敵の情報だけ持ち帰って街に報告しに行くか。
それなら文句も言われないだろ。
「分かった、行ってみよう」
「あぁ。腕がなるな、貴様殿」
ちくしょう、今はその超絶可愛い笑顔が死神に見えるわ。
でも抱き着かれた腕が胸に包まれて幸せだから怒れないんだよなぁ。
※
さぁて、敵さんが見えてきた、と言うかだいぶ前から見えてたんだが。

なんだありゃ、マジでデカいな。下手したら山と同じくらいありそうだ。
うーん。こりゃやっぱり冒険者たちに任せた方が良さそうだな。
俺みたいな一般人がやれることって言ったら情報を持ち帰る事くらいかね。
なんて思っていると、後ろの方から誰かが駆け寄ってくる音がした。
「何だお前ら、同業か？」
立派な革鎧に大きな両手剣。なるほど、こいつが冒険者か。
ガタイも良いし見るからに強そうだ。これなら大丈夫かもしれない。
「いや、俺は傭兵だ」
「なら下がってな。モンスター退治は俺達の仕事だからよ」
「そうか、分かった」
ラッキー。一時はどうなることかと思ったが、後は安全な場所から見物するとしますかね。
「貴様殿!?」
「落ち着け。今はこいつの顔を立ててやろう」
キレかけてるネフィーに耳打ちし、岩陰の後ろに移動する。
そんな俺を見て、冒険者はバカにするように鼻を鳴らした。
「覇気のない野郎だな……まぁいい、そこで見てな！」

そう言い残すと、冒険者は両手剣を担いだまま走り出した。
速い。あんなデカブツを持ってるのにまるで風みたいだ。
瞬く間にオーガに接近し、赤く輝きだした両手剣を振りかぶりながらジャンプする。
「喰らいやがれ、化け物が！」
真正面から堂々とした一撃は、オーガの首を目掛けて鋭く振り下ろされた。
しかし、その攻撃は巨木のような腕でガードされてしまう。
更には筋骨隆々な腕に両手剣が食い込んでしまい、冒険者は舌打ちしながら武器を手放してバックステップで距離を取った。
あれ、なんかヤバくね？
くっそ、ここは手助けくらいしておいた方が良いか。
可愛い女の子が見てるんだし、冒険者を見捨てて逃げる訳にもいかんだろ。
「ネフィー、援護を頼む」
「任せろ！」
自信満々な返事を聞きながら走り出す。
さて、どうすっかなー。まぁオーガの動きは遅いから逃げ回るだけなら大丈夫だろ。
チクチク攻撃して囮になりますかね。
「……こっちだ」

昨日拾った紋章入りの剣で脛を狙って横薙ぎ。
弾かれるかと思ったが、案外スパっと斬れた。
お、意外と切れ味良いなこれ。オーガ相手でも指くらいならいけんじゃね？
となれば、狙いは足の親指かね。人間も親指を怪我したら上手く歩けないし。
よしよし。んじゃ走り回りながら隙を見て……って、あぶなっ！
いま頭の上をオーガの拳が通ったぞ!?
「くそっ！　オーガが暴れて砂煙が……！　傭兵！　大丈夫か!?」
冒険者が何か叫んでるけど、こっちはそれどころじゃない。
あんなもん当たったら死ぬし、ちょっと離れていよう。
あ、岩壁殴って痛がってる。馬鹿だなーこいつ。
「馬鹿な、あれだけ攻撃されて無事なのか!?　何者なんだあいつは!?」
いや、うん。だってそこに居ないもん俺。
そりゃ当たらねぇよ。
オーガも砂煙のせいで俺を見失ってるみたいだし、さっきから岩ばっかり殴ってるもんなぁ。
拳が弾かれたみたいに跳ね上がってるのがなんか面白いんだが。
……あれ？　ていうかコイツ、いま隙だらけじゃね？

「取った！」
喰らえ！　必殺・親指斬り！
思いっきり振り下ろした紋章付きの長剣はオーガの親指に深々と食い込んだが、残念なことに切断するまでには至らなかった。
くそ、行けると思ったんだけどなー。
あ、でもふらついてるから良しとするか。さーて、逃げよう。
「待たせたな、貴様殿！　往くぞ！　極大凍結魔法！」
俺がオーガに背中を向けてダッシュしようとした時、ネフィーの天使みたいな声が聞こえてきた。
やっぱり声も可愛いんだよなー。
でも待って、いま極大魔法って言った？
そんな対城用の広範囲魔法撃たれたら俺も巻き込まれない？
やばい、と思って身を伏せるのと同時。
恐ろしい轟音と共に、俺の背後で凍てつく風が吹き荒れた。
渓谷が一瞬にして冬のような気候に変わり果てる。
おそるおそる振り返ると、わずか十センチくらい先の岩肌が凍り付いているのが見えた。

その先には氷漬け状態で倒れる寸前のオーガの姿。
……あっぶねぇー!?　もう少しで俺も死んでたろこれ!?
割とメチャクチャしやがるな、ネフィー。でも可愛いから許す。
……あ。オーガが倒れた。
ついでに腕に刺さってた冒険者の両手剣がちょうど首に刺さったな。
凍ってたせいか結構簡単にぽっきり折れちゃったわ、首も剣も。
てか親指に刺さってた俺の剣も凍り付いてボロボロになってんだけど。
どんだけ威力あったんだよ、さっきの魔法。
「貴様殿、ご苦労であった!」
おぉっと、いきなり抱き着いてくると危ないぞ?　主に俺の理性さんが。
特大級の柔らかさと蕩けるような甘い香りで頭がクラクラしてるし。
あと間近でその極上の笑顔は止めてください。死んでしまいます。理性さんが。
いかん、顔がにやけそうだ。ちょっと無口なイケメン風に返事しておこう。
下手に口開いたらだらしない声が出そうだし。
「ネフィーも無事か?」
「あぁ、貴様殿が敵を引き付けてくれたおかげだ。やはり頼りになるな」
「そうか。ならよかった」

ところでネフィーさん、抱き着くのは良いけど腕の位置に気をつけてくれませんかね？

俺の二の腕がポヨンポヨンしてるのものに挟まれてるんですけど。

しかも手の甲にぷにっとスベスベな感触があるんだが、これってまさか太ももか？

あ、やば、頭がぼーっとしてきた。鼻血出そう。

「そちらも怪我がなくて良かった」

「……あぁ」

「中々に格好良かったぞ？」

「……あぁ」

「しかしまさか、単独でオーガの首を斬り落としてしまうとはな」

「……あぁ」

うん？　今なんかおかしなこと言われなかったか？

待って、俺がした事ってオーガの親指斬りつけただけなんだけど。

「いや、俺は……」

「よっしゃ！　俺が他の奴らに知らせてくるぜ！」

居たのか冒険者！

ちょっ、足速いなおい!?

「うむ。我も鼻が高いぞ」

えーと。ドヤ顔のネフィーは可愛いからおいとくとして。

なんかおかしなことになった気がするんだが、大丈夫かコレ。

第四話：巨人殺し

■視点変更：冒険者■

長年冒険者をやってきた俺だが、今日はとんでもねぇもんを見ちまった。

かつては仲間たちと一緒に魔王軍とも戦ったことがあるが、あんな奴は生まれて初めてだぜ。

今日戦ったオーガは、魔法で強化した俺の両手剣の一撃を受け切りやがった。

ドラゴンの尻尾を斬り落とした実績がある一撃だ。そう簡単に受け切れるわけがねぇ。

アレはきっと特別な個体だったんだろう。

しかし驚くべきはそこじゃない。

そのオーガと、魔法で強化もされていないただの人間が普通の剣で斬りあってやがったってところだ。

砂煙のせいで良く見えなかったが、そいつはオーガの巨石のような拳を何度も防ぎきっていた。

その時は無駄に時間をかけているように思ったが、今ならはっきりと分かる。
あいつはオーガの注意を自分に向ける為にわざと正面から斬りあっていたんだ。
その証拠に仲間の嬢ちゃんの合図と同時に、巨大なオーガの首をあっさりと斬り落としやがった。
そこから更に嬢ちゃんの魔法でダメ押しだ。あの油断の無さには背筋が凍ったぜ。
オーガ相手にあそこまで冷静に立ち回るなんて、一級冒険者なんて呼ばれてる俺達だって難しい。
あいつはいったいどんな死線を潜り抜けてきたんだろうな。
渓谷の入り口に戻っても、あいつは自慢するわけでもなく淡々としていやがった。
あいつにとってはオーガを一人で倒すなんて当たり前の事なんだろう。
俺もかなり強い方だって思ってたけど、世界ってのは広いもんだな。
あんな化け物がいるなんて聞いたことも無かったぜ。
名前はジェイドって言ったか。傭兵をやっているらしい。
モンスター相手でさえあの実力だ。本業の実力はどれほどのモノか、想像も出来ねぇな。
聞けば昨日の戦争にも参加していたらしい。
参戦した『隣国の兵士』の殆どが戦死したって聞いたが、それも恐らくはジェイドの

仕業だろう。
『国の紋章入りの長剣』を使ってたし、まず間違いない。
こんな化け物を敵に回した奴らを哀れに思うぜ。
ただ、そんな英雄も女がらみに関しちゃ疎いらしい。
一緒に居た嬢ちゃん、アレは確実にジェイドに惚れてる。
あんなに可愛くて胸もデカい女の子に惚れられてるってのに、あの野郎まったく顔色を変えなかったぜ。
アレには周りの連中も苦笑いしてた。
あいつはもしかしたら剣にしか興味がないのかもしれないってな。

■視点変更：ジェイド■
ネフィーさんが積極的過ぎて理性さんがお亡くなりになりかけた。
大質量兵器のダイレクトアタックはかなり強烈だ。
だってふやんって潰れるんだぜアレ。
全身の肌触りもスベスベでモチっとしてんだぜ。
しかも妙に甘い香りとセットだし。
息子が反応しちゃって隠すのが大変だったわ。

しかしあれって誘ってるんだろうか。それとも天然なんだろうか。
誘ってるんならすぐにでも食べてしまいたいんだが、違った時が気まずいなんてもんじゃない。
結局ムラムラするのに手を出せないっていう生殺し状態な訳だ。
性欲が溜まって仕方がない。
という事で、今夜にでも一人でこっそりゴソゴソするか、なんて思ってたんだが。
「我らが巨人殺しに乾杯！」
「最強の傭兵、ジェイドに乾杯！」
なぜ俺はむさ苦しい男どもに囲まれて酒を飲んでいるんだろう。
いや、ただ酒に釣られた俺が悪いんだけど。
「おう、昼間はありがとよ。助かったぜ」
「あんたは冒険者の……」
「グレイだ。よろしくな」
右手を差し出されたから握手を返す。
うわ、ゴツツイな。さすがは冒険者だ。
「まさかあのオーガを一人で倒せる奴がいるなんてな」
「いや、俺は自分の役割を果たしただけだ」

逃げ回って足の親指斬っただけなんだってば。
ネフィーがとどめ指したの見てたろ。
「役割……なるほどな。やっぱりお前は誰かの依頼であの場所にいた訳か」
は？　いや、何言ってんだこいつ。
「お前レベルの奴を雇うとなると国の貴族かね。いや、詳しくは聞かねぇよ。命の恩人にそれは野暮ってもんだ」
えーと。ドヤ顔してるとこ悪いんだが、全く持って見当違いだぞ。
そもそも貴族に雇ってもらってるなら戦場の最前線なんて危ないところに行かねぇよ。
「ともあれ、借り一つだ。何かあったら俺を頼ってくれ。お前には必要ないかも知れねぇけどよ」
「そうか。ならその時はよろしく頼む」
「よっしゃ！　じゃあ飲み直すとするか！」
言いながら持っていた二つの酒瓶の内一つを俺に渡し、ぐいっとラッパ飲みする。
これ相当度数高い酒だが、そんな飲み方して大丈夫かコイツ。
まさか酒好きって噂のドワーフ族の血が混じってたりしないよな？
あいつらも筋肉質な体格らしいし。あぁでも背が小さいんだっけか。

何てことを考えていると、後ろからトントンと肩を叩かれた。
思わず振り返ると、後頭部をぐいっと引き寄せられて前のめりになった。
顔がぽふん、むにゃんと何かに包まれる。
うおっ!?　なんだ!?　何も見えねぇ!?
でも顔中が柔らかくてめっちゃ良い匂いする！
この匂いはまさか……ネフィーか!?
ていう事は、今俺の顔どころか頭全体を包んでるのは!?
「きさまどのー。とても格好良かったぞー！」
「むぐー！　むぐぐ！」
やっぱり！　声が上からするし、これネフィーの胸だ！
ちょ、ネフィーさん、めっちゃ嬉しいけど息ができない！
あと明らかに酔っ払ってんだろお前！
「我のことを助けてくれたし、オーガは一人で倒してしまうし……きさまどのは凄いなー！」
やっべぇ、このままだと死ぬけど離れる気になれない。
もう一生ここに居たい。ネフィーの胸の谷間に住みたい。
いっそこのまま短い人生を終えてしまうのも……

いや！　やっぱりだめだ！
最高の死に方ではあるけど、さすがに童貞のまま死にたくはない！
ここは最大級の意思を振り絞って、一気に離れる！
「ぷはっ……ネフィー、そういうのは二人の時に……」
「……くぅ、くぅ」
え、うそ。まさか寝てる？
ここまでしておいて、まさかの寝落ち？
……はぁ。仕方ない、宿まで運ぶか。
新鮮なオカズもできたし、夜のゴソゴソが捗りそうだ。

第五話：エルフの里

昨晩の事を完全に忘れてしまっているネフィーを連れて馬車で進むこと数時間。
特に何のトラブルも無くエルフの住む森へと辿り着いた。
森の中の舗装された道を進むと、木で作られた立派な門が見えてくる。
ここがエルフの里か。初めて来たな。
「人間か？　我らの里に何用だ？」
おぉ、本物のエルフだ。エルフの里にエルフが居るのは当たり前だけど。
耳長いし美人だけど、噂通りやっぱり胸はないのな。
さて、俺は何て返したら良いんだろうか。
傭兵とか言ったら怖がられるかね。
「シルフィ、我だ」
「ネフィー!?　帰って来たのか!?」
あ、そっか。こんな狭い里じゃ全員知り合いだよな。
最初からネフィーに任せておけばよかったのか。

悩んで損したわ。
「三日も帰ってこないから心配したぞ」
「実は人間にさらわれてしまってな……そこをジェイドが助けてくれたのだ。こやつは一人でオーガを倒せるほどの腕利きだ」
「なに!?　オーガだと!?」
おい、嘘を広めるんじゃない。
これ以上の面倒ごとは勘弁してもらいたいんだが。
エルフのお姉さんも何か悩みだしたし、これさっさと逃げた方がよくないか？
「ジェイド殿、良かったら長に会ってくれないだろうか」
「エルフの長か？」
「我々はいま深刻な問題に直面している。良ければ貴方の力を借りたい」
ほら見ろ。やっぱり面倒なことになったじゃんか。
でもここで帰る訳にもいかないよなぁ。
こんな美人さんのお願いは男として断れないし。
「……分かった。話を聞くだけなら」
「すまないな。道案内はネフィーに任せよう」
「任せろ。貴様殿、行こうか」

うーん。まぁ二人の笑顔が見れたし、とりあえずは良しとしよう。
それはともかく、エルフの民族衣装ってミニスカートなのか。
ネフィーが今着ている服も良いけど、こっちもまた違った魅力がある。
肌面積は多いけど、エロイというよりは可憐って感じだな。
この服のネフィーも見てみたいもんだ。
あとで頼んでみるのもありかもしれない。
※
「客人よ、ようこそおいでくださいました」
「あんたが長か」
「レリウス・グリーンランドです。まずは仲間を助けてくれたことに感謝いたします」
長っていうからどんな爺さんが出て来るのかと思ったけど、普通に金髪のイケメンじゃねぇじか。
世代交代ってやつかね。
「私も千三百年生きていますが、我々を助けてくれた人間は初めてですね」
千三百年!?
あ、そうか。エルフって長寿な種族だったな。
見た目にはよらないって聞いたことあるけど……この人、千三百歳かー。

てことは、実はネフィーも年上だったりするんだろうか。
「我はまだ八百歳だ」
ちらりと目を向けるとドヤ顔でそんな事を言われた。
余裕で年上じゃねぇか。可愛いから何でもいいけど。
あぁ、ネフィーの笑顔はいやされるなぁ。
なんて現実逃避をしていても話が進まないか。
「それで、問題があると聞いているんだが」
「はい。私たちエルフはドワーフと長年に渡り険悪な状態が続いているのですが、それを何とか解消したいのです」
それ、なんか聞いたことあるな。
森の種族と山の種族って事で相いれないとかなんとか。
いやまぁ詳しい話は知らないけど。
「なるほど。話し合いで解決できないのか？」
「それが中々難しく……種族に根付いた価値観は簡単には変わらないようで、使者を送っても返答をもらえないのです」
価値観ねぇ。俺が商人を苦手にしてるのと似たようなもんかね。
あいつらは抜け目がないって言うか、金の為なら何でもやる連中だからな。

俺も知り合いの商人に何度酷い目にあわされた事か。
いや、色仕掛けに負けた俺も悪いんだけどさ。
「そこで人間の貴方に二種族の仲介をしていただけないかと思いまして。依頼としてお願いできないでしょうか」
仲介か。まぁ話をするだけなら危険も無いし、引き受けても構わないか。
「分かった。ひとまず話をしてみよう」
「おぉ！　ありがとうございます！」
しかし種族間の交流問題ねぇ。
ただの傭兵が首突っ込む話じゃないだろと思わなくも無いが、やれることはやってみますかね。
良いものも見せてもらったし。
いやね、この家って土足厳禁で床に座る感じなのよ。
で、俺の向かい側、エルフの長の隣にはミニスカートで正座してるネフィーがいる。
足元にはムッチリした太ももとハイソックスの絶対領域がくっきりと見えているのだ。
更にその奥には見えそうで見えない、でも見えちゃいそうな神秘の領域が広がっている訳で。

つまりはまぁ、そういうことです、はい。
うん、もうこれが報酬でもいいわ。
いやまぁ金が貰えるなら貰っておくけどな。
※
でまぁ、エルフ連れだと意味が無いってことで一人で徒歩で一時間ほど歩き、ドワーフが住んでるっていう森の隣にある岩山に来てみたんだが。
なんで俺、いきなりドワーフたちに囲まれてんだ？
とりあえず怖いからその斧はしまってくれねぇかな。
あと顔が怖いよ君たち。
「貴様！　森の方から来ただろう！　エルフの関係者だな！」
「関係者と言うか、エルフとドワーフの仲立ちを頼まれたんだが。そちらにその意思はあるか？」
「あの高慢なエルフが人間に頼み事だと!?」
高慢？　いや、長は普通に腰の低い良い人だったけどな。
ネフィーはちょっとアレだが。
「……それならひとまず我らの長に判断してもらおう。人間、着いて来い。悪さをするなよ」

よし、とりあえず何とかなったっぽいな。おとなしく後を着いていくか。
ところで今いるドワーフって全員筋肉ムキムキで背が小さいヒゲ野郎だけど……
ドワーフの女の子ってどんな子なんだろうな。

第六話：ドワーフの集落

「貴様がエルフの使いか。ワシはグランドだ」
ヒゲだるまに案内されて来た俺を出迎えたのは、やっぱりヒゲだるまだった。
頭が禿げ上がっていて、ヒゲと筋肉も合わせて威圧感が凄い。
ていうか男臭い。そして汗臭い。さらにはくそ暑い。
なんなんだここ。メチャクチャ暑いんだが。
「すまんな、ワシの家は物置になっているから客人を呼べんのだ。工房で我慢してくれ」
あーはいはい。ドワーフって金属を鍛えるのが上手いんだっけか。
上質な魔剣とかは大体ダンジョン産かドワーフ産だもんな。
てことはここで剣を鍛えたりしてる訳か。ちょっと興味があるな。
「なんだ、気になるのか？」
「あぁ。ドワーフの鍛鉄技術は他の種族とは比べ物にならない程にレベルが高いって聞くからな」
「それは間違いない。鍛冶に関してはワシらが世界一だ」

自分で言うのも凄いけど、まぁ事実だしな。
だが、いま俺が一番気になってるのはそこじゃない。
確かに鍛冶に関しても興味はあるけど、それは後回しだ。
「鍛冶技術が高いのは分かった。だが食料に関してはどうしてるんだ？」
ここに来るまでの間に工房っぽい建物はたくさん見掛けたけど、畑とかなかったんだよな。
岩山に集落があるから外で農業なんて無理だろうし、動物を飼うのだって難しいだろう。
もしかしたら岩でも食ってるんだろうか。
「食料なんかは昔から人間の街で買ってきている。これが中々大変でな」
「それはそうだろうな」
一番近い街でも、ここからだと往復で丸一日はかかるだろうし。
量も揃えるとなるとかなりの重労働だろう。
「しかしワシらは鍛冶と酒造り以外は何もできん。他は買って揃えるしかない」
「そうか。しかしなんで人間の街なんだ？」
「……なにが言いたい？」
え、こわ。いきなり睨みつけるのやめてくれよ。

ただでさえ人相悪いんだからさ、あんた。
「俺はエルフの里を見てきたが、彼らは狩猟と農業を両方行っているようだった。それに植物で作った道具もたくさんあったな」
下手したら俺らの街よりも潤ってるんじゃないかね、あれは。
人口が少ないからってのもあるだろうが、寿命が長いから専門家が技能を引き継ぐ必要がないってのが一番大きいんだろうな。
成長を待たなくて良い分、人間よりもロスが少ない。つまり生産性が高いって事だ。
ついでに言えばエルフってのは魔法にも長けているらしいし、作業の効率も良いんだろう。
「それがどうした。ワシらと何の関係がある？」
「簡単な話だ。エルフと交易したらいい」
「……なんだと？」
「あちらはあちらで困っていることもありそうだしな」
例えば鉄。周りを木々に覆われたエルフの里では大規模な製鉄は行えない。
狩りを行うにも鉄は必要だ。野生の動物相手が木の枝で倒せる訳が無い。
ましてや森には魔獣がいる。そんなモノを相手にするなら金属製品は必須だろう。
「人間の街で仕入れるものが減れば労力削減にもなるし、ドワーフ製の武具の価値も上

がるだろ」
「ふぅむ……しかし相手はあのエルフだぞ。そう上手くいくものか」
「それだよ」
俺がドワーフの集落に来て一番疑問に思ったことだ。
これがそもそもおかしいんだって。
「別の奴も言っていたが、エルフという種族に関して認識が間違っている気がするんだが」
「どういう事だ？」
「あいつらは別種族の俺に大して丁寧な対応をしてくれた。とても高慢な種族だとは思えない」
もちろん俺がネフィーの恩人と言うのもあるだろうが、それを差し引いてもドワーフの認識はおかしい。
あり得るとすれば、だ。
「なぁ、お前は直接エルフと話したのか？」
「ぬぅ……いや、ワシも先代から聞いただけで直接話したことは無いな。エルフの使者とも話をせずに追い返していた」
「それ、昔の長が個人的にエルフを嫌っていただけだとしたら、どうだ？」

「……ありえない話じゃあ無いな。言いたくはないが俺達ドワーフは頑固者の集まりだ。思い込みが激しい種族でもあるしな」
　まぁ見た目から頑固そうだもんな。
　でもこういう奴に限って仲良くなれば情に厚いんだけど。
「どうだ？　よそ者の話だからって信じないのは勿体ないと思わないか？」
「貴様のいう事は一理ある。良いだろう、一度エルフと話をしてみるか」
　言いながら、壁にかかっていたスイッチを拳でゴツンと殴り付ける。
　途端にデカい鐘の音が鳴り、すぐさま奥から女の子が走って来た。
「親方ー。どうしたっすか？」
　おぉ。なんて言うか、緑のツナギを着た褐色ロリっ子だな。
　さすがにネフィーほどじゃないけど胸はしっかりある。並盛だな。
　ていうかツナギの下のシャツがブカブカだから、屈んだりしたらうっかり中が見えそうだ。
　こっちに来て屈んでくれないかなー。
「ミレイ、客人に着いて行ってエルフと話をして来い。この集落じゃお前が一番向いているだろう」
「エルフ？　なんであたしなんすか？」

「倉庫番をしているお前が交易に最適だからだ、お前の好きにやれ」
「なるほど、了解っすー。で、こちらが客人っすか？」
テクテクと歩いて来て……あ、止まりやがった。
くそ、あと一歩で上から見えそうなのに！
……はっ!?　いかん、見てるのバレたらやばい！
「ジェイドだ。よろしく頼む」
「ミレイっす。エルフの里までよろしく頼むっす」
言いながら握手をした時、かなり有益な事実が発覚した。
この子、シャツの下に何も着ていない。
今ギリギリのところまで見えた！
と言うことはつまり。うっかり見えちゃった場合、下着なんかではなく。
男のロマンが丸見えになるってことだ。
日に焼けるような褐色の女の子の聖地はどうなっているんだろうか。
いやぁ夢が広がるな。
「んで、すぐに出発っすか？」
あ、やべ。熱中しすぎた。
「あぁ。大丈夫か？」

「話をしに行くだけなら問題ないっす」

と言うことで。今度は無防備な褐色ロリを引き連れてエルフの里に戻ることになった。

道中、何とか見る機会がないものだろうか。

第七話：和解

ドワーフのミレイをエルフの里に連れていくと、目をキラキラさせて里中を見渡していた。
まぁドワーフの集落にない物ばかりだしな。
とても微笑ましいんだが、面倒ごとを先に片付けてしまいたい。
「ミレイ、先に長と話しをしたいんだが良いか？」
「あ、了解っす。後で案内してくれないっすか？」
「俺もよそ者だからな。長に聞いてみよう」
「やる気が出たっす！」
ぐっとガッツポーズ。可愛いんだが、あまり飛び跳ねないで欲しい。
褐色の肌がシャツの首元からチラチラ見えてるのがスゲェ気になる。
なんてーか、鎖骨が見えてるのがすでにエロイ。
さておき、ちょうど長の家に着いたな。
女体の神秘に関しては後でじっくり検証することにしよう。

「ジェイドだ。ドワーフの使者を連れてきたぞ」
「これはこれは。歓迎いたします」
「ども、ミレイっす。集落の倉庫番してるっす」
「……倉庫番ですか？　ジェイドさん、申し訳ないが説明をしていただけますか？」
「あぁ、中で話そう」
中にはネフィーも居るだろうし、美少女成分は多いに越したことは無いからな。
特大と並盛、両方とも堪能させてもらうとしよう
※
という訳で。
エルフの長のレリウスさんと、ドワーフのミレイ、そして俺が円を描くように座っている。
そしてとても残念なことに、ネフィーはいま席を外しているらしい。
まぁ仕方ないか。知り合いとかも心配してたろうしな。
ただ里を出る前にはもう一度くらい顔を合わせておきたいところだけど。
「話は分かりました。こちらとしてもありがたい提案です」
「話が早くて助かるっす。まったく、誰っすかね、エルフは話を聞かないとか嘘言い出した馬鹿は」

話は簡単にまとまり、エルフとドワーフは互いに必要な物を交易することになった。二種族間の仲も良くなることだろう。

さてさて。これで依頼達成になる訳だが。

「そういえば報酬の内容を聞いてなかったな」

ネフィーのスカートの中に気を取られすぎてたな。

いかんいかん、その辺りはしっかりしてないとまたミスっちまう所だったわ。

タダ働きはゴメンだからな。

「これは申し訳ありません、私も気が急いていたようですね。お恥ずかしい限りです」

金髪イケメンは照れ笑いしながら、後ろにあった箱から小さ目な球を一つ取り出した。

何だか魔力を感じるし、魔法を封じ込めた魔導具だろうか。

「これはこの里でしか作ることの出来ない特別な魔導具です。封印する魔法を何度でも変更できる優れものですので、どうか受け取ってください」

うお、なんだそれ。超便利じゃねぇか。

普通なら先に封印した魔法を使えるだけなのに、こいつは何回でも再利用できるってことか。

売ったらものすごい額になりそうだな。

「そうか、分かった」
ラッキー。これでもう死ぬまで遊んで暮らせるかもしれん。
美少女とも知り合いになれたし、最近運が向いてきたな。
あ、でもネフィーともここでお別れなんだよな。
うーん、それはかなり勿体ない気がする。
何とかして一緒に居られないもんかね。
「ところでジェイドさん、次の依頼があるのですがお話だけでも聞いていただけませんか？」
「何だ？」
「ジェイドさんのおかげで私たちはこうしてドワーフとも和解出来ました。そのことを人間の国にも広めて欲しいのです」
なるほど。外の世界にいるエルフやドワーフにも今回のことを教えないといけないしな。
「その程度なら構わない。行く先で広めておこう」
「助かります。可能であれば王都でこの話をしてほしいのですが、王都に向かわれる予定はありますか？」
王都か。ふむ、どうするかな。

人間の国で一番デカい街だから話を広めるのに最適だけど、あそこって物価が高いんだよな。
でもまぁ、この後の目的地も決まってなかったし、別にいっか。
王都なら魔導具を売り払える店もあるだろうし。
「予定にはなかったが構わん。急ぎの旅でもないしな」
「ありがとうございます。報酬は前払いで金貨をお渡しします」
え、まじで？　話するだけで金貨もらえんの？
普通の街人が何年もかけて稼ぐ額じゃねぇか。
それはさすがに悪い気がするんだが。
「代わりにという訳ではないのですが、良ければ王都まで旅に里の者を同行させてはいただけませんか？」
「同行？　俺は構わないが、なぜだ？」
「新たな見解を得たいからです。今回の件で我々の思考が古い記憶に囚われていたことが分かりました」
なるほど。長く生きてる分、新しい発想ってもんが生まれないのかもな。
その辺は多種族に比べて短命な人間の方が得意な分野なのだろう。
「あ、それはうちもお願いしたいっす。うちも頑固者の集まりっすからね」

ドワーフもかよ。確かにこっちも頭が固そうだしなー。
でも別に一緒に王都に行くくらいなら大丈夫だろ。
エルフとドワーフと三人で旅とか、中々できることじゃないしな。
長い道のりでもないし、気楽にやるとしようか。
うーん。しかし、やっぱり金貨は貴い過ぎだな。
人間欲張ると良いことが無いっていうし、ここは断っておこう。
ネフィーとの出会いと魔導具でお釣りが来るほどだしな。
「分かった、どちらも引き受けよう。だが報酬はいらない。貴重な外貨だろうし、里の為に使ってくれ」
ここはネフィーの故郷でもあるしな。
それにここで金をもらうよりコネを作ってた方が後々得しそうだし。
「そうですか……ありがとうございます」
「感謝するっす！　んじゃ早速集落に行ってくるっすよ！」
「いえ、折角の機会なのでドワーフには私の方から使者を送りましょう。後ほど感謝と歓迎の宴を開きますので、それまでは里を見て回られてはいかがですか？」
「それは良いっすね。うちも混ぜてもらえないっすか？　とびっきりのお酒があるっすよ！」

「ではその旨も合わせてお伝えしておきます」
エルフのご馳走にドワーフの酒か。こいつは豪華だな。
大したことはしてないからちょっと後ろめたいけど、せっかくの申し出を断る理由もない。
滅多にない機会だし、美味いものをたらふく食わせてもらおう。
「ありがたい。世話になろう」
「では時間まで里の見学などいかがですか？　人間のジェイドさんには珍しい物もあるかと思いますよ」
「そうするか。ミレイとの約束もあるしな」
「感謝するっす！」
うん、やっぱり可愛い女の子が嬉しそうにしてるのは良いな。
こっちも得をした気分になる。
あ、ていうかいま気付いたけど、これってデートなんじゃね？
やべぇ、戦争とは違う意味で緊張するんだが。

第八話：エルフ目線とドワーフ目線

■視点変更：レリウス■

人間とは愚かな種族だ。

同族で争い、他者を陥れる事でしか生きることの出来ない哀れな者達。

私はずっとそう思っていた。

しかしそれは私の見分が狭いだけだったのだ。

あの方、ジェイド殿と話してそれがよく分かった。

私はかねてよりの懸念事項であるドワーフとの共存に関して頭を悩ませていた。

彼らとは先代の頃から長きに渡って隔たりがあるが、我らはそれを良しとはしない。

隣人である以上は一定の交流を持つべきであると考えるからだ。

しかし彼らはそうではないようで、何度使者を送っても突き返される日々だった。

そんな折、里唯一のハーフエルフであるネフリティスが狩りの最中に身をくらませたとの報告が上がって来た。

若いエルフが里からいなくなるのは良くある事だ。

経験を積むまでは調和のとれた環境の素晴らしさを理解できず、外の世界を渇望する

事がある。
だが数百年もすれば帰ってくるだろうと、そう考えていた。
しかし彼女は数日後、見知らぬ人間と共に里に帰って来た。
聞けば人間の兵に拉致されていたのだとか。
我らエルフが人間に後れを取るなどそうそう無い。余程の事態だったのだろう。
予想外の事態に思わず息を呑んでしまった。
更には、同胞のネフリティスを人間が救い出してくれたと言うではないか。
私は興味が沸き、礼を伝える事も兼ねてその人間に会ってみることにした。
最初は侮っていた。相手はたかが数十年も生きていない人間の若者だ。
年長者を敬うことも出来ない礼儀知らずに呆れながらも、しかしこちらが礼を尽くさない訳にはいかない。
表面上は丁寧に接しながらも、私は少し意地の悪いことを思いついた。
我らエルフが長年に渡って果たせない命題。
それをこの人間に対して投げかけてみようと。
この愚かな若者がどのような答えを出すのか。それを考えるだけで胸の空く思いだった。
しかし、本当に愚かなのは私の方だった。

彼の答えは、長き年月を生き慣習を貴ぶ我らの盲点だった。
手を取り合う理由を作るという観点を持って、あっさりと問題を解決してしまったのだ。
目から鱗が落ちるとは正にこの事だろう。
人間だから、ではない。過去に似たような問い掛けをした時、人間の老人は見当違いな答えを返して来たのだ。
つまりはそう、私の見る目が曇っていたにすぎない。
知識を有効に生かしてこその知恵。知恵ある者こそが賢者。
つまり彼こそが真の『賢者』だったのだ。
しかし困ったことに、表面上は既に礼を尽くしてしまっている。
この状態で私の浅慮の非礼を詫びるのは彼にとっても失礼に当たるだろう。
何故なら彼はそんな私の思慮すら見通しているのだろうから。
報酬と称して賢者の証であるエルフ秘伝の魔導具を継承する事。
私が見せることの出来る唯一の誠意がそれだった。
彼にならばエルフの業を救ってもらえるかもしれない。
そう考えて頼み込んだ願いに対しても彼は快く引き受け、更に報酬はいらないと告げてきた。

我らエルフとドワーフの協調。その事で産まれる様々な事象。
それこそが人間にとっても理のある事であり、それ自体が報酬であると言外に伝えてきたのだ。
頭の上がらぬ思いだった。この者はどれほどの叡智を蓄えているのか。
我らは語り継ごう。エルフは未だ世界の最奥に達していない。
『賢者』ジェイド。我らが目指すべきはあの若者なのだと。

■視点変更：グランド■

人間って奴はよ、自分の利益を最優先にする奴らなんだ。
上手い話を持ってきてはいつもワシらを騙そうとしやがる。
器用に色んなことをやっているが、一つの事を突き詰めることができない。
そんな中途半端でタチの悪い連中だと思っていた訳よ。
だがな、ジェイドって野郎は違った。
最初は肝の据わった若造が来やがったな、くらいにしか考えてなかった。
うちの連中に囲まれても顔色一つ変えなかったときたもんだ。中々やるもんだなと思った。
だが、あの高慢なエルフが頭を下げた人間と聞いちゃ話は違ってくる。

どんな野郎かと思って直接話をしたくなったのさ。
そして結果的に、その考えは間違っていなかった。
あの野郎はまっすぐな目をしていた。
その瞳には強い意志を感じた。
しかもここに来た理由がエルフとワシらの中を取り持つためってんだから、まぁ驚いたな。
長く続いていたエルフ連中とのケンカも一発で終わらせちまいやがった。
エルフからの依頼とは言えワシらも助かったのは事実だ。
こちらからも何か礼をと思ってたんだが……後で来たエルフが言うには、あの若造はエルフからの報酬も受け取らなかったらしい。
そう、人間がだ。あの強欲な人間がだぞ？　エルフやドワーフの報酬を受け取らないって来やがったんだ。
自慢じゃないがワシらの武器は世界一だ。エルフの連中も魔法に関しては最上級を誇る種族だ。
それをお前、ただの人間の若造が断りやがった。
エルフに聞いた話じゃワシらが仲良くするのが一番の礼なんだとよ。
こんなに気持ちの良い話は今まで聞いたことも無かったわな。

おい、こういう奴をなんて言うか知ってるか？

自分の利益も考えないで誰かの為に動く奴をな、世の中じゃ『聖者』って言うんだよ。

『聖者』ジェイド。良い響きじゃねぇか。あいつにはぴったりの名だ。

もしあいつが何か困ってたらワシらに出来る限りで力になる。

それが俺達の感謝の表し方だ。その日の為にまだまだ腕を磨いておかないとな。

第九話：お誘い

エルフの集落には珍しいモノがそれなりにあった。
人間の街では使われないような魔導具だったり、初めて見る植物で作られたカゴだったり。
中でもミレイが注目したのはエルフの保存食だった。
普通の料理を小分けにし、そこに状態保存の魔法をかけるのだという。
これによって食べ物が腐る事も無く、いつでもとれたてのモノを食べられるんだとか。
やり方を教えてもらったけど、複雑すぎて俺には使えなかった。
何故かオムレツを焦がしてしまう始末だ。やはり俺に魔法の才能はないらしい。
ミレイも無理だったのか少し不貞腐れてる。
ぷくっと膨らんだほっぺたが可愛い。これ突いてみたいなー。
「エルフって凄いっすね。うちとは大違いっす」
「いえいえ、ドワーフだって立派な製鉄技術をお持ちではありませんか。我々はお酒は

あまり飲めませんけれどね」
「エルフは酒に弱いんすか？」
「あまり強いエルフはいませんね」
へぇ。そういやネフィーも記憶無くしてたもんな。
こんなところにも種族差があるってのは面白い話だ。
「と言うかミレイは飲めるのか？」
「あたしっすか？　そこそこっす」
そのロリな見た目で酒が飲めるのか。
いや、他種族だから見た目は当てにならないけど。
「あ、その眼は疑ってるっすね？　何なら飲み比べしてみるっすか？」
「それは構わないが……俺は大して強くないぞ？」
「じゃあ良い勝負になるんじゃないっすか？　負けた方は勝者の命令を一つ、何でも聞くってのでどうっすか？」
「乗った」
今なんでもって言ったよな？　なんでもって言ったよな!?
これはチャンスだ。つまり飲み比べに勝ったらどんな要求でもやりたい放題という訳だ。

ここはやはり、ずっと気になっているシャツの中を見せてもらうのが良いだろうか。
いや待て、それよりもツナギの下を全部見せてもらうってのもありだな。
そして酒の勢いでそのまま同じベッドに入って……
「まーあたしなんて樽一個しな飲めないっすからね」
ふざけるな！　男の純情をもてあそびやがって！
「単位が樽なのか……ドワーフは酒に強いと聞くが、本当だったんだな」
「水より酒を飲む種族っすからね」
どんな種族だよそれ。
でも確かに大酒呑みなイメージはあるな。
あとなんか職人気質なやつが多そう。
「ともかく今夜は期待してるっすよ」
「……あぁ、そうだな」
ステキな言葉だけど夢も希望もないな。
いや、でも諦めずに頑張ればワンチャンあるのか？
くっそ、こんなことなら状態異常解除の魔法とか習っておけばよかった。
酔いに効くかは知らんけど。
「……貴様殿。今の話、詳しく聞きたいのだが」

そんな事を真剣に考えていると、不意に後ろから声を掛けられた。
いつも通り天使みたいな声だけど、何故か少し不機嫌そうだ。
振り返ると予想通り、超絶可愛いネフィーの姿がそこにあった。
胸の下で腕を組んでることもあって非常にエロイ。
「ネフィー？　家族と話をしていたと聞いていたが」
「とうに終わったわ。貴様殿を探していたのだが、まさか我の知らぬ女と出歩いているとはな」
うん？　なんか怒ってないか？
あ、そうか。エルフの里にドワーフがいたらそりゃ怪しむわな。
「こいつはドワーフ族のミレイだ。エルフと交易の取り決めをする為に集落から来てもらった」
「交易だと……？　そうか、そのような手があったか。いかんな、我も定石に囚われ過ぎていたようだ」
顎に手を当てて何かを考えているようだが、細い腕が胸にめりこんでいて非常に素晴らしいことになっている。
いいぞ、もっとやれ。
「あたしはミレイっす！　よろしく頼むっす！」

おぉっと!?　元気に飛び跳ねたせいでシャツの中身が……見えない、だと？
どうなってんだ、なぜ見えない。
ぷるんって揺れたのは見えたけど。
くそ、二人とも微妙なエロは提供してくれるのに決定的な所はお預けかよ。
「我はネフリティス・グリーンランドだ。貴様、ジェイドとはどのような関係だ？」
「関係？　今日知り合ったばかりっすね」
「……そうか。ならば良いのだ、うむ」
おっと、いきなり上機嫌になったな。
何かよく分からんが、やっぱりネフィーは笑ってる方が可愛いわ。
「貴様殿。宴の準備が整うまで今少し時間があるし、それまでは我が里を案内しよう」
「それは助かるが、良いのか？」
「我が望んで行うのだ。問題でも？」
「いいや、大歓迎だ」
「うむ。ならば良い」
うお、最高級の笑顔いただきました！
改めて見るとやっぱり可愛いんだよな、ネフィー。
本当にオーガを倒したのと同一人物なのかね？

俺には天使にしか見えないんだが。
「では行くとしようか、貴様殿」
おっと？　え、なに、腕まで組んでくれんの？
サービス良すぎじゃないですかね。
うわぁ、ほんのり温かくて良い匂いがする。
「あたしも着いて行って良いっすか？」
「うむ、貴様も客人には変わりない。存分に楽しんで欲しいからな」
「感謝するっす！」
「しかしジェイドとは一定の距離を取れ。良いな？
「……ははーん？　なるほど、了解っす！」
え、うそだろ。ネフィーの中で俺って不審者扱いなの？
いや確かにミレイの胸元を覗こうとはしてたけど。
あわよくばとか思ってたけど。
……うん。どう考えても不審者じゃねぇか俺。
「あぁそうだ。王都への旅の同行者なのだがな。わ、我が行くことになったぞ！　別に頼み込んだりはしておらぬが！」
「そうなのか。それは嬉しい限りだ」

「そうか、貴様殿に喜んでもらえると、その……嬉しいものだな」
やだこの子可愛い。ちょっと頬が赤くなってる美少女はクるものがあるなぁ。
なんだかそっちの性癖に目覚めてしまいそうだ。
何にせよ、まだしばらくはネフィーと一緒にいられるのか。
こんな幸せが続いても良いのかね。
「あ、じゃああたしもご一緒するっす。ネフィーさん、協力するっすよ」
おお、じゃあ美少女二人と一緒かよ。最高じゃねぇか。
顔に出さないように気を付けながらひそかに喜んでいると、ネフィーが腕をきゅっと強めに掴んできた。
「貴様殿とは我が一番最初に出会ったのだ。忘れる出ないぞ?」
「は?」
「分からずとも良い。とにかく、ゆめゆめ忘れるでない」
「よく分からんが、分かった。ネフィーが一番なんだな」
確かにミレイより先に出会ってはいるしな、なんて軽い気持ちで復唱したんだが。
何故かネフィー顔を真っ赤にさせて俯いてしまった。
え、何か怒らせるようなこと言ったか俺!?
「貴様殿はその……ずるい」

潤んだ瞳での上目遣いに震える声で言われ、腕をさらに強く引き寄せられる。
凄まじい柔らかさが腕に伝わってくるのを感じ、その魅力に耐え切れずに横を向いてしまった。
まずいまずいまずい！　ネフィーさんが今までにないくらい可愛いんだが!?
よく分からんが、しかし可愛いは正義だ。
ここは黙って堪能しておくとしよう。
しかしこの調子で一緒に旅なんかして、俺の理性は持つんだろうか。
下手したらまた魔法ぶっ放されるかもしれんし、慎重に行こうぜ俺。

第十話：旅立ち

歓迎の宴の翌朝、まだ早い時間に目が覚めた。
ちょっと頭が痛い。昨晩は飲みすぎたようだ。
記憶があいまいだが、確かミレイとの飲み比べには惨敗した記憶がある。
いや、途中でネフィーが乱入してうやむやになったからノーカウントかね。
何にせよとんでもない機会を逃しちまったもんだ。
我ながら情けない。
さておき、今日は王都に旅立つ日だ。
街道を行く楽な行程と言っても気を引き締めないとな。
とりあえず顔でも洗いに行きますかね。
なんて思いながらベッドに手を着いて起き上がろうとすると、途中で何やら柔らかいものが手に当たった。
なんだと思ってそちらを見ると。
そこには、神々しいネフリティスの姿があった。
シーツの上に流れる長い銀髪に埋まるように眠る少女。

普段の凛とした調子とは違う、まるで幼子のようなあどけない表情。
安心しきった様子で微笑んでいる姿は本当にお姫様のようだ。
何故ここに居るのかという疑問より先に、美しいと心から思ってしまった。
そして同時に、超エロいなと思ってしまった。
白雪のような肌を隠すのは、何故か着ている俺の半袖シャツ一枚のみ。
上は鎖骨が見え、下は太もも付け根の際どい部分ギリギリまでを覆っている。
大きな胸は重力に逆らってたゆんたゆん揺れていて、いまにもこぼれてしまいそうだ。
そんな無防備なネフィーがいま、目の前に。
思わず伸び掛けた右手を左手で押さえる。
ダメだって！　さすがにそれはまずいって！
でも、ちょっと触るくらいなら……いや、そこでネフィーが起きたらヤバイだろ！
しかしこんなチャンスはもう二度と巡ってこないだろうし。
だがネフィーに嫌われるようなことはしたくない……！
くそう、俺はどうしたら良いんだっ!?
「……んゅ。もう朝かの？　んぅぅっ」
寝ぼけながらシーツの上で伸びをするネフィーをガン見する。

柔らかな曲線を描く女体は神秘的で、すらりと伸びた白い手足は非常に魅力的だ。
銀糸のような髪が縁取る芸術、それが目の前で躍動的に動いている。
伸びの勢いで形を変える胸も素晴らしく、つい拝んでしまいそうになる程だ。
つまり、最高にエロ可愛い。
思わず手が伸び、するりと頬に触れる。
柔らかに形を変えるそれはとても愛らしく、そして。
その隣にある瑞々しい唇に眼が吸い込まれ。
「ふやっ!?　ど、どうした貴様殿!?　ね、寝ぼけておるのか!?」
その叫びで我に返った。
あっぶねぇ！　いま理性飛んでたんだが!?
あやうく社会的に死ぬところだった！
いかんな、溜まってるんだろうか。
これは気を引き締めておかないと色々と不味い気がする。
「その、なんだ……貴様殿は我に触れたいのか？」
「誤解だ。ネフィーを起こそうとしただけだ」
「そ、そうか……大儀であった」
よし、なんとか誤魔化せたか。

「ところで俺達はなぜ同じベッドに？」
「ん？　あぁ、酔っ払った我が貴様殿をベッドに引きずり込ん、で……」
ばしゅぅ、とネフィーの頭から湯気が出た。
顔どころか全身が真っ赤になっている。
引きずり込んだって、どういう事だ？
「ネフィー？」
「いや別に折角だから一緒に寝たいとか貴様殿の匂いを嗅ぎたいとかそんなことはなくてだな!?」
「落ち着け、誰もそんなことは思っていない」
「そ、そうか……それはそれで複雑なのじゃが」
何故だか拗ねた様子のネフィーに内心ドキドキしながら、表面上はジェントルマンになりきってみせる。
ていうかヤバイ。何だかネフィーがいつも以上に可愛く見える。朝からこの可愛さは致死量だ。
よく分からんが、冷静になるために冷たい井戸水で顔でも洗ってこよう。
「ネフィー、顔を洗ってくる。また後でな」
「う、うむ。それではな」

タオルを持って部屋を出る寸前、後ろから。
「……寝たふりをしていれば良かったかのう」
そんな声が聞こえて、思わずドアに額をぶつけてしまった。
※
エルフの里のみんなに見送られながら馬車を出発させ、ガタゴトと街道を行く。
それほど危険はないと思うが、念のため周囲を警戒するのは忘れない。
「それにしても人間の王都って初めて行くっすね。やっぱり人が多いっすか？」
「そうだな、多種族国家だからいろんな奴がいるぞ」
昔行った時は人間だけじゃなくて獣人なんかもたくさんいたしな。
しっかし、考えてみれば王都なんて何年ぶりだ？
長い事行ってないから街並みも変わっちまってるかもしれん。
「貴様殿、王都に着いたら案内をしてくれぬか？」
「そうだな。俺の分かる範囲なら構わんぞ」
「人間の国か。楽しみじゃのう」
ワクワクした表情に微笑ましいものを感じてつい笑みがこぼれてしまう。
しばらくは楽しい日々が続きそうだ。
空は晴天。いざ、馬車旅日和ってな。

※

なんて思ってたんだけどなぁ。

王都の二つ前の街、ドルバーグ。

隣国アマルガム（俺が雇われていた国）との戦争の最前線に近い街だ。

だから検問が厳しくなっていて街門前で馬車を止められたのだが、兵士の一人が俺の顔を見るなりと砦に走っていった。

なんだろうかと思いながら待つこと数分。

その兵士は俺に頭を下げながらこんなことを言って来た。

「わが軍の将軍がお待ちです。ぜひご同行ください、『巨人殺し（オーガキラー）』殿！」

何でこの街にその名が広まってるんだよ。

第十一話：将軍

■視点変更：ネレイド将軍■

最近ちょっとした噂を耳にした。

渓谷に現れた一匹のエルダーオーク。

一線級の冒険者が五十人ほどで討伐するべき化け物を、たった一人で倒した者がいると。

彼の物はエルダーオークの攻撃を凌ぎ切り、意図も容易く首を切り落としたのだとか。

まったく、馬鹿げた話だ。

未だ戦争が続いていると言うのに軍内でそんな与太話が流れるなど、やはり昨今は兵の質が落ちているようだ。

俺自ら練兵し直す必要があるか、などと思っていた矢先の話だった。

噂の男がこの街を訪れたと報告が入ったのだ。

更に悪いことに、それをたまたま視察に来ていた王女様が耳に入れてしまった。

この方は見目麗しく賢いと評判の才女だが、年相応の好奇心を持ち合わせている。

おそらくだが、噂の男となれば。
「将軍、私は是非ともお会いしてみたいです！　一体どんな方なのでしょうか……！」
「そうですな……せっかくの機会ですし、会ってみましょう」
むう、やはりそう来たか。仕方の無い方だ。
だがちょうど良い。どんな輩なのか、直接剣を交えて確かめてみるか。
王女様も良い息抜きになるだろう。
国王が亡くなられて早半年。
その間常に最前線に来て、休みなく執務を行ってきたお方だ。
いい加減休息を取らなければ体を壊してしまうだろう。
しかし、『巨人殺し（オーガキラー）』か。
万が一噂が本当なら、是非とも入軍してもらいたんもんだな。
※
砦の入口に向かうと、そこにはエルフとドワーフを連れた男が居た。
まだ若い。精々が二十代か。
俺の半分程しか生きていない奴がエルダーオーガを倒したなど、何とも馬鹿げた話だ。
素性のしれない相手と言うこともあり、念の為に王女様には姿を隠してもらうことに

した。
何かあっては一大事だからな。
改めて男の前に立ち、名乗りをあげる。
「ネレイド・フォグストレアだ。貴様が噂の『巨人殺し（オーガキラー）』か」
「その名はやめてくれ。そんな大層な事はしていない」
ほう、ほざきよる。エルダーオーガを倒しておいて大層な事はしていないだと？
ならばこの男はドラゴンでも倒してみせるとでも言うのだろうか。
実に馬鹿げた話だ。
しかし、そこまで虚勢を張るならばこちらにも考えがある。
その腕前を是非とも披露してもらうとしよう。
「よし、では模擬戦でもやろうか。軍内でも最強と呼ばれる俺を倒して見せろ」
俺は戦略を練るのは得意ではないが、生まれてこの方対人戦で負けたことは無い。
実力を測るのに申し分は無いだろう。
それに勇気と蛮勇は違う。身の丈に合わない危険に挑むのは自殺行為だ。
二度と馬鹿な事を言えないように年長者が教育してやらねば、この若者の為にもならない。
そんな考えから出た提案だったのだが、男は苦笑いを返してきた。

「下手したら死人がでるぞ？」
そう語る男の目に、偽りは見られなかった。
この男は己の言葉を確信している。
なるほど、少なくとも自信だけは一人前のようだ。
ならば尚更、俺が叩いてやらねばなるまい。
過度な自信は身を滅ぼす。新兵がよくやる失敗だ。
そうならない為にも、ここで鼻っ柱を叩き折ってやるのが慈悲というものだろう。
「訓練所に行くぞ。着いて来い」
躾の時間だ。久々の模擬戦だが、痛めつける程度ならブランクなど大したものでもあるまい。
そう、考えていた。
※
訓練所に着くと、すぐさま刃を潰した訓練用の剣を投げ渡した。
「さぁ来い。どこからでも構わんぞ」
剣を構えると、ジェイドはまた苦笑していた。
生意気なガキだ。少しばかり教育に熱が入っても問題無かろう。
踏み込んで来たところを一撃で仕留め、立ち上がる限り何度でも打ちのめしてやる。

そう意気込んでいたのだが。
ジェイドは剣をぶら下げたまま、何気無い足取りで歩み寄ってきた。
その姿に覇気は無く、全く殺気を感じ取れない。
馬鹿な。立ち会いの中で殺気を完全に消すだと？
俺でさえそんな事は不可能だ。
まさかわざわざ斬られに来ている訳でもあるまいし、どういう事だ？
動揺を隠せずに居た時、ジェイドが何気無い足取りで間合いに入って来た。
迂闊な。やはりただの馬鹿か。
ならば一撃で沈めてやろう！
構えた剣を鋭く振り下ろす。
空を飛ぶ鳥ですら斬り落とす斬撃は、しかし。
放った直後に敵の姿を見失い、空を斬るに終わった。
「――ッ!!」
次いで聞こえたのは裂帛の呼気。
音になり切れない声とほぼ同時に、俺の首筋に冷たい感触が触れた。
下から伸ばされた剣先には、やはり殺気は感じられない。
……馬鹿な。俺の剣を避け、逆に致命の攻撃して来たと言うのか。

何をされたのか見当もつかない程の鮮やかな剣技だ。
この俺がまるで子ども扱いとは……
「俺の負けだ」
首筋に剣を突き付けられた俺に出来るのは、そう宣言する事のみだった。
確かにこの腕前ならエルダーオークですら打倒しうるだろう。
見事なり、若き剣士よ。
その剣技、『剣聖』と呼ぶに相応しい！
■視点変更…ジェイド■
あっぶねええ!?
足滑らせた時はマジで死んだと思ったわ！
結果的におっさんの攻撃を避けられたから良かったものの、普通なら頭カチ割られて死んでたぞ！
だから言ったじゃん！　下手したら死人がでるって！
俺ちゃん弱いんだからあんまり無理させたら簡単に死ぬからな!?
あーもー……怖かったー。こんなこと二度とごめんだ。
今回はネフィー達が見てたから逃げるに逃げられなかったけど、そうじゃなかったら全力ダッシュして逃げてたわ。

そう言えば二人は、と思って振り返ると、ネフィー達の後ろに何かスゲェ美少女が居た。
輝く金色の髪。深みのある夕焼けのような赤い瞳。
まるで精巧な人形のように整った愛らしい顔立ち。
線が細く華奢で、見るだけで守りたくなるような女の子。
百人に聞いたら百人が美少女だと断言する程の美少女だ。
赤を基調とした豪華なドレスを来ている所を見るに、どこかの貴族令嬢と言ったところだろうか。
俺としてはネフィーの方が好みだけど。
「剣士様、お見事でした。どうかお名前を聞かせて頂けませんか？」
「俺はジェイドだが……あんたは？」
「失礼致しました。私はアルマディン・ルビーハート・コランダムと申します」
美少女はそう言って、スカートの端を摘んで軽くお辞儀をしてきた。
とても優雅な所作に思わず見とれてしまう……ようなことはなく、冷や汗がダラダラ出てきた。
おいおいおい。コランダムって言えばこの国の王族だよな？
やべぇ、俺めっちゃ失礼な態度取ったんだが。

これ不敬罪とか言われないよな？　大丈夫だよな？

内心でビビり散らかしている俺の手を取ると、お姫様は俺の手を両手で包み込んで微笑んだ。

「『巨人殺し（オーガキラー）』様。どうか私たちに貴方様のお力をお貸しください」

……うわあ。またなんか面倒事になる気がするんだが。

第十二話：王女様のお願い

「こんな物しかお出しできませんが」
「すまない。しかし本当に敬語は必要ないのか？」
「はい。こちらがお願いする立場なので」
　王女様直々に高級な紅茶と手作りらしきクッキーを振舞ってもらうのはかなり恐縮するんだが。
　しかも敬語無しとかどんな罰ゲームだよ。
「しかし貴様殿は冷静だな。少しは緊張する姿を見られると思ったのだが」
「あたしはめっちゃ緊張してるっすよ。ジェイドさん凄いっすね」
　いや、顔に出ないだけです。
　今にもガタガタ震え出しそうです。
「それで、話と言うのは？」
「はい。そのお力を我が国にお貸しして頂きたいのです」
「そういう意味だ？」

「一からお話致しますね」
今にも消えてしまいそうな儚げな微笑みを浮かべながら椅子に座ると、王女様は地図を取り出して見せた。
その様子にネレイド将軍がしかめっ面で口を挟む。
「アルマディン様……彼は部外者ですぞ」
「ネレイド将軍。このままでは我が国は滅亡の一途を辿るだけです。それならば現状に何か一石投じるのは無駄では無いですよね」
「……それもそうですな。元より退路は無いのでした」
「えぇ。何もせずに死ぬか、足掻いて死ぬか。私は後者を取りたいのです」
何か物騒なこと話し始めたんだが。
いやいや、そんなことに俺を巻き込まないで欲しいんだけど。
うーん。このまま帰してくれそうにも無いし、話だけでも聞いてみるか？
「こちらの地図をご覧ください。これが現状の勢力図です」
「この青いのがコランダム王国か？」
「はい。見ての通り、滅亡間近です」
だろうな。青い箇所って殆ど無いし。
となるとこっちの赤い箇所が隣国のアマルガム帝国か。

確かにこのままアマルガム帝国と争ってたら一年もせずに国が滅ぶだろうな。
しかも次の戦いは防衛戦だ。突破されたら敵兵は王都まで一直線に進んでくるだろう。
「これ以上の巻き返しは不可能です。かなりの数の兵を失っていますし、兵站も底を尽きます」
最前線で戦う兵隊の為の食料も確保できない、と。
そもそもその兵隊自体が用意できないとなると、確かに詰んでるなこれ。
せいぜい傭兵を雇って王族が逃げる時間を稼ぐくらいしか……あ。
なるほど、そういう事か。
「ふむ。つまり王女殿下が逃げる為の時間をジェイドに稼げと?」
「ネフリティス様、それは違います。ここで逃げても周りは全て帝国領。すぐに見つかって斬首されるでしょう」
あれ、違ったのか。じゃあどうしろって?
そう思いながら王女様に目を向けると、こくりと頷かれた。
「ジェイド様には戦場に出て、我が国を救っていただきたいのです」
思ってたより滅茶苦茶なこと言い出したな!?
「つまり国の命運を流れの傭兵に任せると言うのか」

「はい。お受けしていただけませんか？」
おいおい、とんでもないなこの王女様。
そもそも傭兵なんてものは金さえもらえば何でもやる奴らだ。
昨日敵軍だった奴が今日は味方、何てことは珍しくも無い。
そんな信頼できない奴の力を借りようだなんて、コランダムは本当に滅亡寸前なんだな。
だがまぁ、それはそれとして。
いや、無理無理。そんな責任が重そうなことやりたくねぇよ。
それに負けが決まってる戦争だろ？　勘弁してくれよ。
何か断る手は……そうだ、報酬！
「しかし報酬はどうするんだ？　俺の雇用報酬は高いぞ？」
さぁどうだ。報酬が高いなんて大嘘だけど、これできっと諦めてくれるはず。
「報酬は私で如何でしょうか」
「王女様が？　どういう事だ？」
「そのままの意味です。私の全てをジェイド様へ捧げます」
「この話、乗った」
こんな美少女が俺のものになるとか断る理由が無い！

……あ、やべ。つい反射的に返事しちまった。
「いや、やっぱり今のは――」
「貴様殿、やはり受けてしまうのか。貴様殿は全く救いようの無いお人良しだな」
「ちがっ――」
「負けが決まっている戦と分かり切っておるだろうに。だが、うむ。貴様殿はそうであろうな。助けを乞われてしまっては見捨てられまい」
待って、俺の話を聞いて。
いま断ろうとしてんだろうが。
「もちろん我も参戦しよう。アルマディンとやら、任せておくが良い。何せジェイドは最強じゃからの」
え、ネフィーさん引き受けちゃうんですか？
ちょっと待って、考え直そうぜ。戦争の最前線で戦えってことだよこれ。
「あ、じゃああたしも乗るっす。楽しそうなんで！」
ミレイも!?　つーか楽しそうって凄いなお前!?
「皆さま……ありがとうございます」
あああああ!?　美少女が涙目で微笑むのは反則だろ!?
くっそ、本気で逃げ場がないじゃねぇか！

……ええい、こうなったら仕方ない！

「俺達に任せておけ」

もうやるだけやってみるか。

なぁに、こっちには対城用広域魔法を使えるネフィーがいるんだ。

適当にぶっ放してもらえばきっと何とかなるだろう。

最悪の時は王女様を連れて逃げちまえば良い。

王女様一人だけなら辺境の村とかに連れていけば何とかなるかもしんないしな。

将軍？　おっさんなんて知った事か。

俺はいつでも自分の命と金と可愛い子の為にしか働かん！

「私の事はアルマとお呼びください。よろしくお願いします『剣聖』様」

そう言って微笑む王女様。

うん、可愛い女の子の頼みだし、死なない程度に頑張るか。

第十三話：岩山の戦場

さて、戦場に出てみたは良いものの。
これはまた、うーん。どうしたもんか。
俺が指定された戦場は小さな岩山。
切り立った崖のような地形になっており、兵が隠れる場所は無数にあるから防衛戦に向いてはいる。
更にここは主戦場の北に繋がっているらしく、敵を壊滅させれば南にある主戦場で味方との挟み撃ちが可能らしい。
ちなみに主戦場に出ている兵は二百で、敵は三百程なんだとか。
かなり分の悪い戦いだ。
つまりここでの戦いに勝てなければこちらの負けがほぼ確定するだろう。
こちらに来ている味方はざっと二十人ほど。そのほとんどが傭兵で、国軍の兵士は新兵が数人だ。
対して敵軍は六十人なのだとか。三倍だぞおい。

しかも魔法師が二十人いるらしいからネフィーの魔法による砲撃も正面からだと厳しいだろう。
「ふむ。貴様殿、どう出る？」
「これはさすがに無理じゃないっす？」
うん。俺も無理だと思う。
いくら地の利が自軍にあるとは言え、戦力差が三倍で敵は正規兵。
更にこちらは戦いなれているとは言え、ほとんどが傭兵で構成された寄せ集めの軍だ。
これでははは連携なんてろくに取れないだろう。
マジでどうしたもんかなー。
何はともあれ、逃げ道だけは確保しておきたいから周囲の見回りをしたい所だな。
でもそんな格好悪いこと、ネフィー達に言えないしなぁ。
……よし、適当に誤魔化しておくか。
「ネフィー、辺りを散策してくる。味方の戦力の確認を頼んだ」
「それは良いが、一人は危険ではないか？」
「近場を回ってくるだけだし問題ないだろう。それにすぐ戻る」
心配してくれるのはありがたいけど、退路は調べておかないと怖いからな。

敵もまだ近くにはいないらしいし、ささっと調べて来てすぐ帰ってきたら大丈夫だろ。

※

ふむ、これで一通り見終わったな。

逃走経路も確保出来たし、さっさと帰りますか。

しっかし、本当にどうしたもんかね。

事前に聞いた感じだとこっちの戦場が勝てば主戦場も勝ち目は出てくるだろう。

でも戦力差が三倍ってかなり厳しいんだよな。

まともにやったらまず勝てないし。

うーむ。どうしたもんか……っと、あれ？

あそこになってる果物ってルビーフルーツじゃねぇか？

うっわ、高値で取引される希少な果物がこんな所にあるとは。

これはついてるな。取れるだけ取って持って帰ろう。

あ、でも結構高い位置になってるな。

これは木を登らないと手が届かない。

かと言って切り立った崖の上だし、登るのはかなり怖いし。

……よし、剣を伸ばして落とすか。

石より固いフルーツだし、地面に落としても問題無いだろ。
よっと。ふんぬ。そいやっ。
……うーん、中々落ちないな。
こうなったら思いっきりジャンプして……ほいっと！
よっしゃ、届いた……あ。
やべ、足元に地面がない!?　落ちる!?
「ぎゃあぁぁあああ!?」
くっそ、こんな間抜けな死に方は嫌だあああ!!

■視点変更：アマルガム兵■

隠密行動作戦は今のところ上手く行っているようだ。
コランダムの連中も、まさかこんな所を通って来るとは思わないだろう。
何せ馬も通れないほどに狭いし、横は岩と崖に挟まれているような道だ。
だからこそ警戒が緩いと予想してたが、当たりだったみたいだな。
コランダムの連中はネレイド将軍以外は大した脅威じゃないし、奴のいないこの地点は楽に勝てるだろう。
敵の拠点を大回りして背後から奇襲、これでケリが着くはずだ。

速度を重視したから革鎧で兜も無いが、奇襲する分には問題ない。
それにこちらの奇襲部隊の数は二十人。敵全軍と同数で、更に魔法師だって十人も連れて来ているのだ。
これで負ける理由が無い。
そう思いながら行軍していた時、頭上から何かが聞こえてきた。
「――アァァァァッ!!」
それが雄叫びだと気付いた時には、既に。
奇襲部隊の先頭を歩いていて小隊長は脳天を剣で貫かれていた。
「なぁっ!?」
突然の出来事に俺たちは何が起こったか理解できず、落ちてきた男を呆然と見つめる。
男は、嗤っていた。
その禍々し姿を見て、ようやく我に返って叫ぶ。
「て、敵襲――」
だが次の瞬間、頭上から大量の石のような何かが降ってきた。
咄嗟に飛び退いた俺以外は直撃してしまい、悲鳴を上げながら崖から落ちていく。
俺も利き手に直撃してしまい、剣を取り落としてしまっていた。

馬鹿な……罠を仕掛けていただと？
俺たちの行動が読まれていたっていうのか!?
落ちてきた男は動揺する俺を見ると、魔獣のような獰猛な笑みを浮かべて剣を構える。
そして返り血を拭いもせず、嬉々として語りかけてきた。
「よう、生き残ったんだな」
その言葉に背筋が凍り、気が付けば俺は全力で逃げ出していた。
くそっ！　あんな化け物がいるなんて聞いてねぇ！
たった一人で二十人の奇襲部隊を倒す化け物なんて情報になかったぞ!?
ともかく情報を持ち帰らないと……そうだ、俺はその為に撤退してるんだ！
自分自身に言い聞かせながら、俺は一目散に走って行った。

■視点変更：ネフリティス■

傭兵たちから話を聞いていると、少し離れた場所から大勢の悲鳴が聞こえて来た。
何事かと思い数人の兵を連れてその場に急行すると、そこには血だらけのジェイドが立ち尽くして居た。
「ネフィーか。済まないが何か拭くものをくれ」

「貴様殿！　何があった!?」
「大丈夫だ。怪我も無い……それに、もう終わった」
ジェイドが崖の下を指さす。
そこには、二十人程の敵軍の亡骸が転がっていた。
まさか……敵の奇襲を読んで一人で殲滅したのか!?
確かに通常ならば考えられぬ事態だが、それを成したのがジェイドなら納得が行く。
この男にとっては容易い戦いだっただろう。
……しかし、だ。
「貴様殿、何故我に言わなかった?」
一人であればいくらジェイドでも危険はあったはず。
今日会ったばかりの傭兵たちはともかく、敵と戦う事を我にも言わなかったのは心外だ。
我とて誇り合るエルフの一族。ジェイドの背を守るくらい訳も無い。
もしや……我も信頼されていないのだろうか。
そう思い悩む我を見て、ジェイドは苦笑を漏らす。
「何も危険は無いはずだったんだ。それにネフィーが怪我でもしたら困るからな」
……なんとも呆れたことだ。そんな理由でこの数の敵を屠ったと言うのか。

ジェイドにとっては大した事では無いのは理解出来る。出来るのだが……
いかん、ここは二度とやらぬように釘を刺さねばならんのに、つい顔がにやけてしまう。
ジェイドが我を大事に思ってくれている。
その事実がこれ程までに嬉しいとは。
「貴様殿。その、な。気持ちは嬉しいのだが、あまり無茶はしないでくれ」
「すまない。次からは気を付ける」
まるで子どものように謝るジェイドの姿に思わず胸が締め付けられる。
無類の強さを見せ付けながらも、我の前ではこうして弱い部分を見せてくるとは……
こやつは本当に、どうしようも無い男だ。
これでは我も強く言えぬではないか。
むう……ひとまずお説教は後にして、我自らジェイドの汚れを拭ってやるとするか。

第十四話：命の対価

無駄に欲を出すとろくな事にならない。
それが骨身に染みる事件だった。
いや、まさか崖下まで一直線に落ちるとは思わなかった。
たまたま下に居た敵に剣が刺さって落下の勢いがマシになったから助かったけど。
でもその後にルビーフルーツが大量に降ってきた時はマジで死ぬかと思った。
自分の運の無さに思わず笑っちまったけど、本当に死ななくて良かったわ。
敵軍の生き残りが居たから笑ってごまかそうとしたら、全力で逃げられたのはちょっとショックだったけどな。
そんなに顔が怖いか、俺。
それはさておき。
話は変わるが、現在半裸状態で美少女に体を拭かれている件。
ネフィーが濡れた布で俺の背中を一生懸命拭ってくれている訳だが、これがかなり心地良い。

狭いテントに二人きりだからネフィーの呼吸や匂いを感じるし、なんだか安心するのにドキドキする。
「貴様殿、痛くはないか？」
「あぁ、大丈夫だ」
「すまぬな。このようなことは慣れておらぬ故……これで良し。後ろは綺麗になったぞ」
「助かる」
全身血塗れだったからなぁ。
かなり気持ち悪かったし、自分じゃ届かない背中を拭ってくれたのは凄くありがたい。
後は自分で出来るがズボンを脱がなきゃならないし、ちょっとネフィーには席を外してもらって――
「次は前だな。動くでないぞ？」
え、ちょ、ネフィーさん？
この体制から前を拭くってまさか。
「よっと……うむ、貴様殿の背中は広いな」
あああああ！　いま俺、半裸でネフィーに抱き着かれてる!?

背中が暖かいし柔らかい！　あと首筋に息が当たってる！
何これすげぇご褒美タイム来たんじゃね!?
でもこれ死ぬほど恥ずかしいんだけど!?
「んっ……これ、動くでない。上手く拭けぬではないか」
「いや、ネフィー。嬉しいんだが、その……前は自分で拭けるから」
「そう言うな、我がしてやりたいのだ。貴様殿には助けられてばかりだしな」
言いながらも俺を拭く手は止まらない。
優しく、なめらかで、まるで産毛を撫でられるような感触。
ネフィーが動くたびに背中に当たる水風船のような感触が形を変え、少し乱れた熱い吐息が首筋に触れる。
至近距離で香る仄かな甘い匂いに脳がおかしくなりそうだ。
何これヤバイ、身体がゾクゾクする。
ていうか理性がどうこう以前にうちの息子さんの主張がヤバい。
ちょっとこれ、ズボン越しでも見せられる状態じゃないんだが。
一旦手を止めて貰わないと何とは言わないが暴発するかもしれん。
「ネフィー。その辺りで……」
「なぁ貴様殿。一つ、言いたいことがあるのだ」

え、何だいきなり。この状況でなんでそんなシリアスな声出してんのこの子。
「あの日、我を助けてくれたことに感謝している。言葉では表せぬほどに」
消えてしまいそうなほどにか弱い力で、俺の身体をぎゅっと抱きしめてくる。
「あの時出会ったのが貴様殿で良かったと、そう思っているのだ」
「……そうか」
言えない。あまりにも見苦しいもの見せられたから勢いでやっちゃったなんて絶対言えない。
いやまぁ助けたいって気持ちがあったのは事実だけど、何か後ろめたいんだが。
「しかし我には返せるものが無い。命の対価など、我には分からぬのだ」
とくん、とくんと。背中から伝わるネフィーの鼓動が次第に速まっていく。
俺を抱きしめる手に力が込められていく。
「なぁ貴様殿。我が持っているものはあまりに少ないのだ。だから、その、な」
そして、俺の背中にぽてりと額をくっつけてきた。
熱い。まるで熱病に侵されているかのように。
「……我が差し出せるのは、我そのものくらいでな?」
ぎゅっと、ひと際強く抱きしめられる。
言葉に込められた想いを表すかのように、強く。

「貴様殿が良ければ、なのだが。もし、こんな我でも良ければ」
とくんとくんと鼓動が聞こえる。
これは果たして、どちらの心音なんだろうか。
混ざりあってしまったかのように区別がつかない。
ただ、身体が熱い。違いの体温が心地よい。
「……その。もらってくれない、だろうか」
破裂しそうなほどに、心臓がうるさい。
頭が蒸発してしまいそうになりながらもゆっくりと、胸元に回されたネフィーの手に自分の手を重ねる。
ネフィーがビクリと跳ね、背中に当たる双丘が潰れる。
走った後のように荒い吐息を感じながら、決意を固めて返事を口にする。
「ネフィーさん、まだっすかー！」
その寸前、テントの入り口がバサリと大きく開かれた。
きょとんとしたミレイの顔を見て、二人揃って硬直する。
「あれ？　どうしたんすか？」

ボン、と。背後でネフィーが爆発する音を聞いた気がした。
「な、なななな!?　なんでもないぞ!?」
「え、でもネフィーさん、顔真っ赤っすよ?」
「ええい!　なんでもないのだ!　いいから行くぞ!」
「え、ちょ、どこに連れて行くんすか―!?」
戸惑うミレイを引きずって早歩きで去って行くネフィーの背中を見送り、濡れた布で顔を拭う。
ぬるくなっているはずなのに、やけに冷たく感じた。
やばい。これはもう、やばい。
完全にやられてしまった。致命傷だ。
頭の中がぐちゃぐちゃで整理が追いつかない。
落ち着けよ俺。そんなんだから童貞なんだよ。
うわぁ……ちょっと頭を冷ましてから行くか。
息子さんにも静まってもらわないと困るし。

第十五話：主戦場

あの後、斥候に出ていた傭兵の報告を受けてすぐに戦場に向かう事になった。
主戦場ではやはり味方が押されているらしく、急いで援護に向かう必要があるらしい。
こちらは俺を含めて二十人しかいないが、真後ろから奇襲をしてやれば敵の陣形も乱れるだろう。
まずは広域魔法で敵を叩き、その後に歩兵部隊でかく乱する。これが恐らくベストだ。
オーガを一撃で仕留めたネフィーの火力なら大打撃を与えることも出来る。
とかまぁ真面目なことを考えてはいるんだけど。
さっきからつい目がネフィーに向いちゃってんだよな。
意識するなって方が無理だろこれ。
普段から超絶可愛いネフィーが今は百倍くらい可愛く見える。
その艶やかな唇に視線が向かい、ゴクリと生唾を飲んだ。

やばいなこれ。あの可愛さだけで魔王を滅ぼせるんじゃないだろうか。
あ、目が合った。
ちょっと顔が赤いのが更に可愛いんだが。
やっべ、頭が沸騰しそうだわ。
「――ジェイドさん、敵軍が見えたっすよ」
おっと、しまった。もうそんなに進んでたのか。
言われてみれば確かに遠くに敵軍の姿が見えるな。
ていうか普通に着いて来てるけど、ミレイって戦えるか？
「あ、その顔はまた疑ってるっすね？　普通の魔物くらいならこのハンマーで一撃っすよ！」
え、その背負ってる奴、玩具じゃなくて本物なの？
長さ三メートル、先端は幅一メールくらいあるけど。
そんなくそデカい物、小さいミレイが扱える訳が……あ、はい、すみませんでした。
軽々と振り回してますね。余裕でぶんぶんしてますね。
あ、地面に置いただけで小石が割れた。
ふむ、凄いな。
まぁ俺としては風が巻き起こって胸元がチラチラしてる方が気になったけど。

「そうか。無理はするなよ」
「分かったっすー」
うん、元気があってよろしい。
ただジャンプするならもう少し俺の近くでやってくれないかね。
あとちょいで中が見えそうなんだよな。
はっ!?　いかん、俺にはネフリティスっていう天使がいるじゃないか！
本能のままにエロを追い求めるのは……
……いや、まぁ、うん。そこはバレなきゃ良しということにしておこう。
さってと。気を取り直して、戦争しますかねー。
「ネフィー、頼めるか？」
「う、うむ。我に任せるが良い！」
こほんと一つ咳払いしてネフィーが前に出る。
そして両手を前にかざすと、すっと顔付きが変わった。
天使のような微笑みから、凛とした戦乙女のような表情へ。
「とっておきをくれてやろう！　皆の者、下がっておれよ！」
膨大な魔力が渦巻き、ネフィーの手の先に巨大な魔法陣がいくつも浮かび上がる。
極彩色に輝く魔法陣は次々と数を増やしていき、やがて前方一面を埋め尽くしてし

まった。
前回は見ることができなかったが、ネフィーの魔法はこんな感じなのか。
使用者に似て、とても綺麗だ。
魔法陣の光に照らされたネフィーがにぃ、と笑う。
「喰らうが良い！　極大爆炎魔法！」
キュイン、と魔力の光が一点に集中し、射出。
放たれた紅蓮の光弾が敵軍に向かって真っすぐ飛んでいき、着弾。
同時に、世界が吹き飛んだ。
敵軍はおろか周囲の木々や地面すら巻き込んだ爆発。
その威力は凄まじく、一瞬で平地に巨大な穴が穿たれる。
うっわぁ、えげつねぇ。
敵軍の半分が消し飛んだぞ、おい。
「まあまあかの。貴様殿、後は任せても良いか？」
「さすがだな。上出来だ」
ドヤ顔で胸を張るネフィーの谷間をガン見した後、後ろに居る味方に目を向ける。
「剣聖様！　俺らが先に行きます！」
「行くぞ野郎ども！　突撃だ！」

「おうッ！」
勇ましく叫びながら駆けていく彼らを見て、その最後尾に着いて走る。
この場所なら一番安全だろう。
みんなには悪いけど俺は死ぬわけにはいかない。
だってこの戦争が終わったら初彼女ができるんだからな！
先頭の連中が敵陣を突破していくのを見届けていると、なんか血塗れになったおっさんがこっちに走ってくるのが見えた。
鎧を見た感じ、どうやら味方のようだ。
「剣聖殿ォ！」
「その声、ネレイド将軍か!?」
「いかにも！　いや、凄まじい一撃でしたな！」
ええと、うん。豪快に笑いながら敵を斬ってるのはちょっと怖いんだが。
頼もしいっちゃ頼もしいんだけど、あまり近くに来ないで欲しい。
てか強ぇなこの人。敵が訓練用の藁人形みたいだわ。
「正面に敵部隊が集まっている位置があります！　いざ、蹴散らしましょうぞ！」
はぁ？　いやいや、なんでそんな危なそうなところに行かなきゃならないんだよ。
俺ぜったい嫌だよ。

「ネレイド将軍、俺は他にやることがある」
「なんと!?　それは敵兵を討つ以上に重要なことなのですか!?」
「あぁ、俺にしか出来ない事だ。そちらは任せても良いか？」
「承知！　ではこの俺にお任せください！」
よっしゃ、危ない役割を押し付けることができた。
後は適当に森の中とかに隠れて戦争が終わるのを待とう。
この勢いならまず勝てるはずだし。
よし、そうと決まれば全力ダッシュだ！
※
森の中を歩くこと五分ほど。
遠くから金属がぶつかり合う音や男たちの怒号が聞こえてくるが、森の中は静かなものだ。
虫や鳥の声が聞こえてくるくらいで、平穏そのもの。
ついさっき毒蛇を見掛けたものの、それ以外は何の危険も無い。
その毒蛇もちゃんと捕まえて袋に入れてるし、これで何も問題ないはずだ。
ここに居れば無事に過ごすことが出来るだろう。
そんでもって、その後は……うへへへ。

いやぁ、生きてて良かったわ。まさか俺にも春が訪れるなんてなぁ。
ちょっとイメージトレーニングでも……あれ？
何してんだあいつら。こんな森の中になんで敵軍の兵士が居るんだよ。
とっさに木の陰に隠れて様子をうかがってみる。
人数はざっと三人。となればこれは、たぶんお偉いさんを逃がしてるんだろうな。
見た感じだと……あいつか。一人だけ豪華な鎧着てるし。
「魔法士。まだ時間がかかりそうか？」
「すみません、魔力の調整が上手く行かなくて……」
「急げ。早く本国に戻って立て直さねばならないからな」
あいつらの足元にあるのは……魔法陣か？
ネフィーのとは比べ物にならないくらい小さいけど、多分あれ転移魔法用の簡易魔法陣だわ。
なるほど、あれで一気に自国まで帰ろうとしてるのか。
うーん。あの位置ならまぁ、いけるか？
一対三だが、この作戦なら何とかなるだろ。
無理そうなら全力ダッシュで逃げるのみ。
という訳で。ちょっと頑張ってこい！　さっき捕まえた毒蛇ちゃん！

そぉらよっと！
「うわ!?　なんだ!?」
「さっさと離れ……ぐわぁッ!?」
「司令官！　くそ、こいつめ！」
おーおー、思ったより大混乱だな。
やっぱりお偉いさんなんてもんは、蛇にも慣れてない奴が多いよな。
俺みたいな底辺だと山で野宿とか当たり前だから慣れ切ってるもんだが。
ていうか敵を噛んだのか。偉いぞ毒蛇ちゃん。
んじゃ左手で土を握り込んで、後ろからこっそり近づいて……右手の剣で、てえりゃ！
「ぐはっ!?」
はい一人目。
「な、なんだこいつ!?　いったいどこから!?」
うるせぇな。喰らえ、目つぶし！
「うわっ!?　何も見えな……かはぁッ!?」
よーし、これでお終いだ。お偉いさんは蛇に噛まれて動けないしな。
何とか怪我も無く乗り切れたな。

いやぁ、蛇ちゃんが良い仕事してくれたわ。
卑怯？　それは敗者のいい訳だよ、キミ。
ふははは！　世の中、勝てば正義なのだ！
「……おい、聞いているか？　貴様は敵国の者だろうが、頼みがある」
お、なんだなんだ？　敵のお偉いさんが何か言い出したな。
そろそろ毒も回るだろうし、死に際の言葉くらい聞いといてやるか。
「私はもうじき死ぬ。だが、蛇の毒などで死んだとなっては一族の恥さらしだ。だから頼む、私の剣で私の首をはねてくれ」
殺してくれってか。昔も似たようなこと頼まれたことがあったな。
見栄とか恥とかプライドとかさ、そんなもんで腹が膨れるかっての。
人間なんて生きてこそだろ。死んだら全てが終わっちまうんだし。
でもまぁ、毒でジワジワ死ぬよりは楽な死に方ではあるか。
「分かった。お前の名前は？」
「……感謝する。ツェペリン・ロマンシアだ」
「覚えておく。じゃあな」
剣を両手で振りかざし、そして降り降ろした。
……相変わらず、嫌な感触だな。これは一生慣れたくねぇわ。

ふむ。しっかしコレ、良い剣だな。
報酬代わりに貰っておくか。
ブンと一振りして血を払い、そのまま構えてみる。
こうしてると自分が強くなった気がして気持ちが良いもんだ。
何か適当に格好良いセリフとか言ってみちゃおうか。
「見逃してやる。だが、次は無い」
おぉ、結構良い感じじゃね？
戻ったらネフィー達にも見せてやりたいくらいだわ。
あ、てかいい加減戻らないとな。
あっちも落ち着いてきたみたいだし、こっそり合流するか。

第十六話：戦の夜

帝国の名将ツェペリン・ロマンシア。
深淵なる謀略を巡らせる知将にして、帝国でも有数の剣豪。
戦場で見せる猛々しい姿から『帝国の獅子』と呼ばれる男だ。
その才能は凄まじく、彼が出陣した戦は一度たりとも負けがない。
まだ歳若いが、将軍の地位に就くのに相応しい傑物である。
次の戦で適当な戦功を上げ、その後に将軍となる予定だった。
そんな若き英雄ツェペリンが戦場に散ったという報告は、帝国の軍議室を震撼させた。
「馬鹿な、ありえん。滅亡寸前のアマルガムの残党を狩るだけの戦のはずだぞ?」
「それが、報告書によりますと……序盤は敵国のネレイド将軍を抑える事に成功し我が軍が優勢でしたが、一人の傭兵が率いた二十人の遊撃軍により我が軍は壊滅したとの事です」
「なんだと!?」

軍議室がザワつくが、それも当然の話だった。
帝国軍の兵数は三百。それも一般兵ではなく、帝国の近衛騎士団候補すら混ざった精鋭部隊だ。
その戦力は通常兵で換算すると千は超えるだろう。
対して敵軍は寄せ集めの兵が二百だけ。戦力差で考えると五倍程になる。
それをツェペリン程の才能の持ち主が率いたとなれば負ける道理などあるはずも無いのだ。
しかし。
「上級隠密魔法を用いていた偵察兵によりますと、ツェペリン殿は転移魔法で撤退しようとしたようですが……その偵察兵が目を離した十秒程で護衛の兵も合わせて一人の傭兵に討ち取られたようです」
「それも遊軍の司令官か……」
たかが傭兵如きが武勇に秀でるツェペリン将軍を討ち取った。
そんな事は簡単には信じられないが、報告として上がって来た以上は信じるしかない。
軍議に参加している者全員の頭に恐れがよぎる。
「さらには……その……」

「まだ何かあるのか!?」
「上級隠密魔法を使用していたにも関わらず、偵察兵の目の前に剣を突きつけてこう言ったそうです」
『見逃してやる。だが、次は無い』
「おい、その情報は確かなのか!?　上級隠密魔法は感知能力に優れた魔物すら気づけない魔法だぞ!?」
喧騒に包まれる室内。
もはや取り止めの無いこの場所で、一人の老人が呟いた
「つまりその傭兵は、ツェペリン殿よりも剣の腕が立ち、魔法の腕も一流と言うことじゃな?」
『魔導師』グラーフ。
世界に名高い最高位の魔法士であり、帝国最強の騎士『千刃』と共に皇帝を支える二本柱の一人だ。
腰の曲がった老人の姿ながら、彼から感じる圧力は凄まじいものがある。
「グラーフ殿……まさかこんな馬鹿な話を信じるのですか?」
「実際に被害が出ておるのだ。信じぬ訳にもいくまいて」
柔らかに微笑みながら立ち上がると、枯れ枝のような指でテーブル上の地図を指し

た。
「はてさて。敵が最前線を押し上げてくるとして、奴らの次の目標はこの砦じゃろうな」
「まさか。そのフォルス砦は天然の要塞、攻め落とすには五倍の兵力が必要です」
「通常ならば、じゃな。しかし報告が正しければここを攻めるはず。それに万が一報告が間違っていても、ここならすぐに最前線に兵を送れるからの」
穏やかに笑うグラーフ。その顔には一切の動揺が見られず非常に冷静だ。
いや、冷静と言うよりは。
「グラーフ殿……？」
「ふぉっふぉっ……いやさ、やはり強者がいると知れば滾(たぎ)るものがあるわい」
ふつふつと、目に見える程に濃密な魔力が立ち上る。
彼は微笑んでいた。だが同時に、その目には強い喜びがあった。
「まさかこの歳で血気に逸るとは……長生きはしてみるもんじゃな」
軍議室内に広がる怯え。彼が本気を出せば帝都ですら一日と掛からずに廃墟となるであろう事を、この場の誰もが知っている。
それ程までに強大な力を持つ『魔導師』グラーフは、長い杖で床をトンと突いた。
途端に足元に巨大な魔法陣が広がり、老人の姿を包み込む。
「はてさて、ひとまず暗殺者の手配でもしようかのう。それでも生き延びたなら……ワ

シが直々に出向くとしようか」
ゾッとするような歪んだ笑みを浮かべた老人は、魔法陣の光と共に軍議室から姿を消した。
■視点変更：ジェイド■
戦勝の宴が終わり、その夜。
夜だ。夜だよ。ついに夜になったよ。
うへへへへ。
今夜ついに俺は大人の男になるんだ！　やったぜ！
念の為にテントは一人用のやつを用意して貰ったし、体もしっかり拭きあげた。
簡易ベッドもちゃんとあるし、準備は万全だ。
ロウソクの明かりしか無いけど、狭いテント内ならバッチリ見ることが出来るだろう。
という事で現在、静かに正座待機中。
ネフィーも準備を済ませて来るって行ってたけど……もうそろそろ来るかな。
ヤバい、興奮しすぎて鼻血が出そうだ。
我ながらちょっと引くくらいドキドキしながら入口をガン見していると、いきなりテント内のロウソクが消えた。

何だ、と思った次の瞬間、テント内に人影が現れる。
おっと。ネフィーさん、どうやら転移魔法で来るくらい急いでくれたらしい。
恥ずかしいから魔法でロウソクを消したんだろうか。
どうでも良いけど恥ずかしがってる女の子って良いよな。
「来たか。待っていたぞ」
緊張から言葉遣いが固くなってるのがわかるけど、今更どうしようもない。
ヤバい、とにかく何とかしないと……！
「しっ――」
心配するな、と言いながら立ち上がろうとして、正座のせいで足が痺れて転んでしまった。
頭上をヒュンと掠めたのはネフィーの腕だろうか。
もしかしたら抱き締めようとしてくれたのかもしれない。
うわ、恥っず！　ダサすぎんだろ俺！
何とか挽回しようと勢いよく立ち上がる。
しかし今度は伸ばして来ていたネフィーの腕を下から叩いてしまった。
ちょ、何してんだよ俺!?
ネフィー怪我してないよな!?

カチャリと何かが床に落ちる音を聞きながら慌てて手を伸ばした時。
「貴様殿、何やら物音がしたが……」
テントの入口の布を捲りあげてネフィーが覗き込んで来た。
……え？　あれ？　じゃあコレ、誰よ？
驚きのあまり動きを止められず、伸ばした手が人影に勢いよくぶつかる。
「かはッ!?」
あ、やべ。思いっきり殴っちまった。
うっわぁ、大丈夫か？　結構ヤバい勢いだったけど。
……てゆか、これ誰よ？
「貴様殿!?　こやつ、暗殺者か!?」
……え？
「まさか我が気付かぬ程に卓越した手練を送り込んで来るとは……それより、貴様殿は無事か!?」
「……あぁ、大丈夫だ」
大丈夫だけど、ちょっと理解が追い付かないです。
なに、暗殺者？　しかも手練の？
なんでそんな奴がここにいんの？

「このレベルの暗殺者を無手で捕らえるとは……さすが貴様殿よの」
「いや、俺はただ――」
「分かっておる。無用な殺生はしたくないのであろう？　暗殺者に情けをかけるのは優しすぎる気もするがの」
ちゃうねんて。
ちょっと現状を説明してくれない？
「しかし貴様殿。困った事になったな」
「どうした？」
今以上に困ることなんてあるのか？
既に意味わからなさ過ぎて手一杯なんだが。
「その、だな……今宵は忙しくなる故、な」
両手の体の前で合わせてモジモジしながらネフィーが言う。
ていうかよく見たらいつものパジャマ代わりのTシャツじゃなくて、体のラインがハッキリ分かるネグリジェの上に毛布被ってるだけじゃねぇか。
これはアレか、ネフィーなりに準備をして来てくれたんだろうか。
だとしたら、ヤバい。めちゃくちゃ嬉しい。
「……ベッドを共にするのは、またの機会にしてくれないか。貴様殿と寝る勇気が無く

なってしまったのだ……」

頬を赤くして俯くネフリティスさんが可愛いすぎて、危うく心臓が止まるかと思った。